# 多香鳥

# 目次

文書 7
文書 7 . . . . . 3

文書 8
文書 8 . . . . . 29

文書 9
文書 9 . . . . . 43

文書 10
文書 **10** . . . . . 59
奥書 . . . . . 85

文書 7

# 文書７

文書７
（圓位文書Ａ）
（圓位から久村へ、cc. 香香美）
2019.09.06. メール
眉村和哉氏及びその妻深雪又その子息眞夜羽の件
先の９月４日夕刻に嚴島祇樹古藤記念山羽香奈枝女史との面会ありました件、一部始終報告しておきます。
愚僧の思惑としては当初山羽さんに眉村氏宅にお伺い戴くつもり、しかれども山羽さん曰く、第三者立ち合いのほうが宜しかろうと。
仍て愚僧提案するに沙羅樹院奥の離れ日本間を場所として提供の上愚僧立ち合おうと思いますが如何に？ 山羽さん曰く宜しと。
故、４日午後５時半に面談なる。
添付のファイルご確認いただければ幸い。
又、其の上でさまざまにご意見いただければ愚僧、いよいよ嬉し。
ではご一読のほど。

〇圓位文書Ａ
９月４日、午後５時過ぎに香奈枝さん本堂を訪れる。沙門圓位と談話。
此の時に眉村氏一家の昨年６月このかたのあらましを口傳、山羽さんあらかたご存じのようでした。
山羽さん曰く、今日が眞夜羽くんとは初對面の由、故、雑談程度の話の方がいいかもしれせんね。
愚僧答えて曰く、案ずるよりそのままに計るよりなるままに任せたがよろしいでしょうと。
山羽さん曰く、まだ何か起こってるわけじゃありませんからね。
愚僧、その言い方がなにというでもなくに心に残って、故、曰く、何か起こりそうだと？
山羽さんすこし考えて曰く、噂でいろいろと聞くじゃありませんか、と。
愚僧それ以上は追及せず。
噂云々、愚僧も既に知ること。
島の人々曰く、眉村氏どうも家庭内に暴力等多し、と。
眞夜羽くん虐待の疑いあり、と。
曰く、結婚当初はむつまじかったものの妊娠中に眉村氏輕いノイローゼの氣を見せたか？

是は後の島民の解釈。未詳。
出産後、夫婦関係に緊張あり。
或人曰、ある日深雪さん目をはらしていた、と。案じて理由を聞くに答えけらく転んだ、と。もちろん眞僞さだかならず。
又或人曰、夜、時に眉村家から夫婦言い争いの聲聞こえりと。その聲おおかた深雪さんの喚く聲であってその間その間に一重さんの仲裁らしい聲雑じる、と。此の事、最初深雪さん暴れるのを一重さんのなだめるの聲に聞き、耳を澄ますにどうやら夫婦の諍いを姑の仲裁する様と合点した云々、但し此れも未詳。
或人曰、一重さんからいまどきの夫婦の円満の秘訣なんてものはないものかと、立ち話笑い話の内の一種のこぼれ話としてそれとなくに聞かれたことあり、此の時に此の人一重さんに問いけらく、あなたのところ若夫婦はそんなに不仲なのか？
一重さんさん答えらく、昔と今じゃ夫婦仲なんていうのも、かたちが違うからね、と。
更に問いけらく、喧嘩なんかするのか？ 仲良さそうなのに。
答えて曰く、夫婦の内と外なんてわからないものよと云々。
或人曰、ある日眞夜羽素っ裸で泣きながらに山道を走り下りるのを深雪さん追いかけて保護、泣きながらに連れて帰るのを見た云々、是、恐らく眞夜羽くん５歳程度の時か。此の時眞夜羽くんの素肌に夥しい殴打のあとあり云々、ただし時刻は夜の七時、必ずしもその見取りの正否、目撃本人もさだかならず
或人曰、是は眞夜羽くんのともだちのお母さまの話。ある日眞夜羽くんと友人Ａくん埠前の広場で游ぶ。于時眞夜羽くんとＡくんからみあって転ぶ。Ａくんが眞夜羽くんにうしろからとびかかった故。
A 君母あわてて駆け寄るに上にのしかかって無傷の A 君泣きじゃくる。下に敷かれて膝等軽くすりむく真夜羽君泣きもせず、ややあって A 君を大人びて諌める。曰く、いくら子供の遊びだからってね、うしろからとびかかったら、危ないよ。危ないくないように、游びは気をつけなきゃいけないよ、云々（尤も、これ等が本当なら本当の発言はすべて嚴島の方言だったはずである。念の爲註ス）
A 君母、自分が云うべき事を子供に取られて仕舞って、此の子よく出来ただねと感心した云々。
A 君母、眞夜羽に曰く、眞夜くんはつよいね。うちの A は泣いて、泣いて、怪我してないのに泣いて、もう、女の子だね（A 君は男兒）
眞夜羽答えて曰く、仕方ないよ。子供だもん。
A 君母、眞夜くんも同じ年でしょうよ？ 眞夜くんは強いからえらい。
A 君曰く、眞夜は馴れてるからだよ。
A 君母曰く、あんたといっしょよ。眞夜羽くんは転んでも泣かないから男の子。あんた、泣くから女の子。
A 君曰く、眞夜はいっつも殴られてるから慣れてるよ。
眞夜羽笑う。且つに云いけらく、A は女なの？
A 君曰く、お父さんにいっつも殴られてるからだよ。
眞夜羽云けらく、A は女だったんだね（と、笑い、囃す）
A 君曰く、毎晩、毎晩、いじめられてるからだけじゃん

此の時にA君母囃し立てる眞夜羽に若干不快（もっとも、今愚僧思うにそもそも愚弄の意味なす言葉を吐いて与えたのはA君母當人であって、眞夜羽は口眞似したにすぎまいや、と）、故、それ以上追及せずにA君に、曰く、あんたもわけのわからない事いわないの。さっさと泣き已みなさいよ云々
A君、もう泣いてないよ。ぼく、もう泣いてないよ云々。
後、息子の云った言思い出されて気になればA君母、事の詳細といただそうかともおもったものの、子息の教育上の悪影響考えて深く追求せず。云々
又或人曰、小学校一年の時。授業開始時間に教室に行っても生徒ざわついて治まらない、と。故、（子供の爲）笑って諌める、しかれどもざわつきやまず。故手をうちならし諌めるしかすがにざわつきやまず。故黒板うちならしながら諌めれどもなおもざわつきやまず。故終に教師怒鳴る。
時にようやく鎮まり爾に教師問い糺しけらく一体なにごとかと。
一同沈黙。
ふたたび云う、何ごととですかと
同じくに沈黙。
みたび云う、何事？ 白状しないと先生もう帰りますよ。於是一分女子児童泣き出してしまい彼の女教師言い過ぎたと思った時に眞夜羽立ち上がって云いけらく、ぼくのせいです、と。
故教師問いけらく、なにしたの？ と。
眞夜羽もじもじするだけで何の答えも云わず。故、對の端の某君立ち上がって云けらく、先生、眞夜羽くんは月に歸ります、と。ちなみに聞く所によるとこの児童大変利発で有名。故、困惑する級友を助けんとしたのだろう。
教師問う、月？
某君答えて曰く、月から来たんで、月に歸るんです。
於是教室内再度ざわつき始めた故、此の話打ち止めにせんとし教師なにをばかなこと云々言いかけた時に眞夜羽曰く、でも、ぼく、月に帰ったら食べられるよ。
于時、教室ざわめき立つ。
眞夜羽曰く、ぼく、おじいちゃんやみんなに食べられるよ。
教師是等一連の妄想を眞夜羽が口走ってそれを鵜呑みの児童の騒ぐと此の時思い当たって一同鎮まらせらた後眞夜羽に曰く、そんなことないから、大丈夫よ。
眞夜羽「あるよ。絶対だよ。
教師「なんでそんな莫迦なこと思い始めたの？ テレビ？ ゲーム？ 漫画？
眞夜羽「ちがうよ。
教師「なによ
眞夜羽「お母さんが教えてくれた。
教師「お母さん？
眞夜羽「毎晩毎晩、お母さんが教えてくれるよ。
教師「なによそれ
眞夜羽「お父さんも、おばあちゃんもみんな知ってるよ。
云々。

此の教師已に退任ずみ。理由は定年。一云、現在広島の実家に歸られ悠々自適云々。故、此の挿話は子供たちが口傳に兩親等にはなしたものが愚僧の耳にも入った次第。
又或人、愚僧に相談しにこられて曰く、深雪さんたち保護した方がよくはないかと。
愚僧問う、何故？
其人答曰、ある日スーパーの前で深雪さん眞夜羽君と逢った。故、しばし話した、と。取り留めない話するうちに時は夏場、暑くていやねと、不意に、「それとなく見せつけるように」自分の胸元襟首を仰ぎたてる。薄着なのでその内が見えそうになる。
その人女同士になにをしているかと不審におもうともなく想い居るにちらと胸元に引っかかれたような跡の見えた、と。故、その人問う、あれ、なに？
深雪さんことさらにあわて胸元惜し隠す。
その人更に問う、なに？ どうしたの？ 真っ赤じゃない。
深雪さん答えてなんでもない、と。話しも打ち切り急ぎ足に返って仕舞ったと。
その人愚僧に云けらく、あれはご主人に折檻されてるんじゃないかと。此の時深雪さんに問いただす間、その傍らに眞夜羽くんその人を見上げ、「此の子に殺されるんじゃないと思うような」「どぎつい」「怖い」目をしてにらんでいたと。
愚僧、半信半疑で（その人、話に尾ひれを盛大につける人だった故）しばし静観しましょうか、と。
その人不安を謂うでも無し、謂いたいことを言い切った満足の後に歸らんとする後ろ姿に呼び止めて曰く、＊＊さん、あれ、息子さんのしわざだと思っておられない？
その人返り見て謂う、なに？
愚僧云う、深雪さんの件。
その人愚僧を見、と見こう見し、軈て曰、いやだ。ばれちゃうのね。...あれさ、あのこがやってるのよ。
愚僧「それ又なんで？
その人「知らないわよ。けど、そうじゃない？
愚僧「いい子らしいじゃい？
その人「わからないわよ。...あの子よ。
云々。
その他噂話多数。尤も大半は虚偽、残りの大半は誇張ならんや。
山羽女史、故、さらにだに転生の妄想、毎朝の彷徨等あれば、なにかしら起こってもおかしくはないと、口に出さずともそう案じておいでのように愚僧、察した次第。
かくて十数分遅れて眉村親子到着す。
最初は当り障りない雑談になごませようかと愚僧画策し、眞夜羽くん此の寺の離れに来るのが始だったと記憶せし故そのあたり子供に話ししばしは戯れようかと思う矢先に和哉君愚僧におもむろに問いけらく、此の人が、その病院の？
愚僧「こちら、祇樹古藤記念園の山羽さん。...香奈枝さん。聡明な方でらして、
山羽「そんなことないですよ...（と、彼女もまず場を和ませようとことさらに反応してみせたのである）
愚僧「お美しいし、それに聖人君子で、お若いし（彼女は五十前）
和哉「どう思われます？

愚僧「どう？
和哉「息子の件...もうお聞きになった？（と山羽に）
山羽「ええ、あらかた
和哉「住職から？
山羽「さっき、詳細を、ね？（と私に）
和哉「じゃ、どう思われますか？
と。和哉氏更に咬みつくように何か言いかけ深雪さん眞夜羽くん默止、愚僧このとき黙らっしゃいな、と和哉氏を一括。
和哉氏默止。
愚僧云深呼吸されたほうがいい、と。
和哉氏愚僧を見、と見こう見し、なにか言いかけ愚僧云、一回、深呼吸して、おちつかれればいい。
於是深雪さん泣き出し、山羽さん彼女に添う。
愚僧、和哉氏に「いそいじゃだめ。あなたが落ち着いてね、しっかり、どおんと構えておらないと奥さんも息子さんも、心病んでしまわれるよ云々
和哉氏默止す。
深雪さん云「もう本当に、あれからいろいろあって...
山羽「いろいろ？
深雪「いろいろ、此の子、本当にわたしの子なんだろうかと、...でも、そう思うよ？じゃないん？ 云々
愚僧山羽慰め諫めようとするに深雪さん「あの頃に帰りたい。
山羽「あの頃？
深雪「去年とか一昨年とか？ まだなにも無かったころ、あのころ、今思えば何もなくて幸せで云々
山羽「奥さんも不安よな？ でも息子さんが一番不安よ
深雪「そうなの？ そうなんでしょうか？ 云々
山羽「自分の子疑ってどうするの？
深雪「わたしの子じゃないよ。
山羽「あなたが生んだんでしょうが？ 女だったら、馬鹿でもわかる事でしょうが
深雪「でも、今は違うでしょう？
山羽「何が違うもんか云々
愚僧、暫くの間に言の深刻化したことに気付く。
愚僧、眞夜羽に云「気にしなくていいんだよ
眞夜羽「してないよ。
愚僧「本当？
眞夜羽「お母さん、毎晩なく
此の時深雪眞夜羽をしかりつけようとするので山羽諫める。
愚僧「じゃ、心配だね。
眞夜羽「仕方ない。
愚僧「仕方なくないよ。なんで仕方ないの？

眞夜羽「ぼく、お母さんたちの子じゃないから。
和哉「なにを...
眞夜羽「知ってるよ
和哉「何を云いだす。
眞夜羽「僕知ってる。
愚僧「なに知ってるの？
眞夜羽「僕捨てられた子だから。
愚僧「棄てられた？
眞夜羽「捨てられて拾われた。
愚僧「お母さんに？
和哉「こんなこと...こんなことばっかり
と。和哉氏取り乱しはじめ故愚僧やわらかく諫めつつ「子供の云うこと、一回、しっかり聞いてあげましょ。
愚僧「いつ、だれに棄てられたの？
眞夜羽「比呂斗もそうだよ。
愚僧「比呂斗くん？ 茨の？ 茨の比呂斗くんも捨てられたの？
眞夜羽「ぼく、捨てられて、お母さんたちに拾われた。
愚僧「何で知ってるの？
眞夜羽「聞いた。
愚僧「誰に？
眞夜羽「お母さんに（此処で深雪喚くうそ、嘘、なにもかもでまかせ、なんでも、ぜんぶ、此の子嘘...）
眞夜羽「嘘じゃないよ。
愚僧「でも、だったら、感謝しないと。
眞夜羽「なんで？
愚僧「だって、拾われっ子の眞夜羽くんを、こうやって大事に育ててくれてるよね？
眞夜羽「そうだよ。すっごい、やさしいよ。
愚僧「じゃ、感謝しないと。
眞夜羽「感謝してるよ？ ぼく、...
愚僧「じゃ、お父さんお母さんに言わないと。
眞夜羽「なにを？
愚僧「ありがとうって。
眞夜羽「なんで？
愚僧「感謝してても、いわないと傳わらないでしょう？ 親子でも、詞でいわないとさびしいよ。
眞夜羽「ありがとう。
手をついて、眞夜羽は父と母にそう云った。
かくてしばし何でもない雑談をし...この話の大半は山羽が毎日の勤務の大変さを笑い話に語り聞かせたのである。後、山羽は眞夜波と会話し始めたのである。
山羽「でもさ。眞夜羽くんも（是は蝶と話をするという入園者の笑い話の流れにふった

話である）普通の人に見得ないもの、見得るよね？
眞夜羽「ぼく？
山羽「じゃないの？
眞夜羽「ぼくの話？...だれに聞いたの？
愚僧「見えない？
眞夜羽（山羽に）「だれ？
山羽「こちらの圓位さんに、眞夜羽くんすごい子だね、いろんなもの見えるよって
眞夜羽「嘘だよ。
山羽「嘘なの？
眞夜羽「それは嘘だよ
山羽「眞夜くん、うそ謂っちゃった？
眞夜羽（愚僧に）「顔のこと？
山羽「顔？
眞夜羽「顔...じゃないけど、顔。死んだ人。
山羽「すごい。見得るね...それ、嘘だったの？
眞夜羽「嘘？...この人が？（とわたしを差した。和哉諫めかけ愚僧制す）
山羽「じゃ、圓位さん嘘つき？
眞夜羽「聞きたい。
山羽「聞く？
眞夜羽「聞いていい？
山羽「いいよ。なに？
眞夜羽「ぼく、嘘つきなの？
山羽「眞夜くん、嘘云ったの？
眞夜羽「おばさん（是は山羽）、今、そういったじゃん。
山羽「言ってないよ
眞夜羽「言ったよ。今。嘘つきって。ね？
山羽「なに？
眞夜羽「聞きたいの、與婆飛のこと？
山羽「ヨバヒ？...なに？
眞夜羽「じゃない？
深雪「それ、朝の...
愚僧「朝の？
深雪「ここのところの、...
山羽「眞夜くん、毎朝どこか行っちゃうね。あれ、余婆飛してるの？
眞夜羽「それは嘘じゃないよ。
山羽「與婆飛ってなに？
眞夜羽「おかあさんが見つけてくれる。
山羽「おかあさん？
眞夜羽「與婆波禮弖久登於迦阿沙牟賀美都祁弖久禮流
愚僧「呼ぶ？ 呼ばうの？ 呼ばれるの？

眞夜羽「余婆飛の聲、するよ。
愚僧「呼ばれる？
眞夜羽「寢てると。
山羽「誰？
眞夜羽「與婆飛碁惠？
山羽「誰の聲？
眞夜羽「撲。
山羽「眞夜くんが、自分で、眞夜くん、呼ぶの？
眞夜羽「たぶん。
山羽「なんで、たぶん？
眞夜羽「知らないもん。だって。でも、誰も他にいなかったら、そういう時は、それ、自分の聲だよ。
愚僧「なんて呼ぶの？
眞夜羽「聲？
愚僧「その與婆飛碁惠、眞夜羽くんになんて呼びかけるの？
眞夜羽「歸るよって。
山羽「どこに？
眞夜羽「月。
山羽「すごいね。かぐや姫だね。
眞夜羽「あれ、うそじゃん。
山羽「嘘？
眞夜羽「あれ童話じゃない？ 嘘だよ。白雪姫もうそだよ。
山羽「でも、眞夜羽君はかぐやひめ...かぐやひこ？ なんでしょ？
眞夜羽「迦具夜比古？
山羽「女の子お姫さまじゃん。眞夜羽くん、男の子じゃない？
眞夜羽「でも、あれ、空の月じゃん
山羽「かぐや比賣？
眞夜羽「與婆布のは海の月だよ。
山羽「海に月あるの？
眞夜羽「本当はね...でも
山羽「だから、海に言ったの？
眞夜羽「いつ？
深雪「三日前...四日前...三日...
眞夜羽「あれ、嘘だよ。
深雪「嘘じゃない。お母さん嘘謂ってない
眞夜羽「海、瀬戸内海じゃないよ。
愚僧「ちょっとまって。それ月の海？
眞夜羽「海の月だよ。
愚僧「海の月の海？
眞夜羽「それ、瀬戸内海じゃないから。だから帰れない。

山羽「困ったね。
眞夜羽「そっちの方がいいよ。
山羽「帰れないと、困るね...
眞夜羽「困らない。
愚僧「どうやったら歸れる？
眞夜羽「海に？
愚僧「死んだら、歸れるかな？
眞夜羽「無理。
愚僧「じゃ帰れないね？
眞夜羽「歸れるよ。たぶん。でも歸りかたしらない。
山羽「でも、困らないの？
眞夜羽「困らないよ。
山羽「帰りたいのに？
眞夜羽「別に。
山羽「何で？ 帰りたくなの？
眞夜羽「別に。
山羽「何で？
眞夜羽「與婆禮琉けど
山羽「帰れなくていいの？
眞夜羽「帰ったら、おじいちゃんに食べられる。（此処で又深雪泣き出す。山羽、愚僧捨て置く。深雪云、もうなさけない。本当、情けない云々その繰り返しを小聲に暫し）
山羽「食べられるの（故意に殊更おどろき）
眞夜羽「ぜんぶ食べられる。
山羽「それ、困ったね。悪いおじいちゃんだね。
眞夜羽「関係ないよ。
山羽「関係あるよ。食べられたら痛い。死んじゃうよ。
眞夜羽「おじいちゃんもう死んでる。
山羽「眞夜くんも死んじゃうでしょう？ 食べられたら。
眞夜羽「死なないよ。
山羽「すごいね！ 死なないってすごいね！ なんで？
眞夜羽「おじいちゃん、食べられないよ。
山羽「眞夜くん、食べられないの？
眞夜羽「おじいちゃんが、食べられない。
山羽「眞夜羽君は、海の月に帰ったら、おじいちゃんに食べられるって言ったね。
眞夜羽「言ったよ。
山羽「いま、おじいちゃんに食べられないって言ったね。じゃ、嘘だね。
眞夜羽「嘘？
山羽「なんで、嘘ついた？ ついちゃった？ つきたくなっちゃった？
眞夜羽「おじいちゃん食べられるわけない。歯、ないもん。
山羽「歯？

眞夜羽「口も無い。なにもない。
山羽「それって
眞夜羽「なにもない。
山羽「死んだら...ごめんね。しんじゃったら、ね？ なにもなくなっちゃうの？
眞夜羽「おじいちゃん死んでないよ。
山羽「嘘よ、だって
眞夜羽「誰も死ねない
山羽「ごめん、死んだと思いたくないんだ。眞夜くんは。
眞夜羽「死んだ。
山羽「眞夜くんのなかでは、生きてる？
眞夜羽「死んでるけど、でも、（と、愚僧に）おじいちゃん死んだことある？
愚僧「まだ、ないね。
眞夜羽「死ねないから。だから死んでない。
山羽「でも、おじいちゃん、死んだんでしょ？
眞夜羽「でも、死ぬの、見た？
山羽「おじいちゃんが？
眞夜羽「死ぬの、見た？
愚僧「たぶんこの子、死などだれも知らないだろうと。死んだことも無いものがなんで死を云々できるかと。そんなものは生者の翫ぶ概念にすぎぬと
眞夜羽「そうなの？
山羽「ごめん、その、なにもないひと...
眞夜羽「なにもないひと？
山羽「口も、歯も、
眞夜羽「あれ、人じゃないよ。
山羽「それ、おじいちゃん？
眞夜羽「たぶん。
山羽「自信ない？
眞夜羽「そうでもない。
山羽「じゃ、ほかに、誰っぽい？ おじいちゃんじゃなかった、誰だろ？
眞夜羽「他に？
山羽「誰か、思いつく？ 他にだれか、思いつかない？...ね、誰だろ？ それとも、何？ 何か？ 例えばどんな事？
眞夜羽「無理。
山羽「無理？
眞夜羽「おじいちゃんじゃない？
山羽「なんで？
眞夜羽「だって、ぼく、おじいちゃんの子供だから。
此の時に深雪は笑った。和哉は嘆く眼差しをした。そして深雪は云った。「この子、おじいちゃんっ子だったから。
愚僧「孫にはどうしても、甘くなるからね。

深雪「甘やかせてばっかり。おばあちゃんも。叱るの、いっつもわたし。だから、嫌われるのも、いっつもわたし。
山羽「何言ってるの（笑う)。それが役割よ。
深雪「さびしいのかな。おじいちゃんいないと。
と。深雪は眞夜羽の肩に手をまわし、そして自分に引き寄せた。眞夜羽は従った。
山羽「ね。（と、思いついたように山羽は眞夜羽に問う）
眞夜羽「なに？
山羽「おばさん、質問（と、手を上げた)。
眞夜羽「なに？
山羽「余婆飛の時さ、...ね？
眞夜羽「なに？
山羽「眞夜くん、何してる？
眞夜羽「歩いてる。
山羽「なんで？
眞夜羽「與婆布から。
山羽「どこに？
眞夜羽「だから、月に、行かないとなんだけど、行けないから、
山羽「歩いてる？
眞夜羽「そ。
山羽「目、見得てる？
眞夜羽「ぼく？
山羽「そ。
眞夜羽「見えてるよ。
山羽「そのときも？
眞夜羽「今も見えてるよ。
山羽「なにを見ながら、歩くの？
眞夜羽「道とか。
山羽「普通の？
眞夜羽「山とか。
山羽「他に、
眞夜羽「顔とか？
山羽「顔も見えるの？
眞夜羽「だって、いつも見えてるもん。普通に。だから、普通じゃない？
山羽「いまも？
眞夜羽「顔？
山羽「そう。
眞夜羽「見えるけど...
山羽「どんな？
眞夜羽「顔？
山羽「どんな顔？

眞夜羽「言えない。
山羽「なんで？ 顔、謂うなって言ってる？
眞夜羽「難しいもん。云うの。
山羽「どんな？
眞夜羽「いっぱい。ぐっちゃぐっちゃで、ごっちゃごちゃ。
山羽「ね。
眞夜羽「なに？
山羽「歩いてるとき、...道、余婆飛のとき、なに考えてる？
眞夜羽「おじいちゃん？
山羽「眞夜くん。
眞夜羽「僕？
山羽「なに考えてる？ なに、感じてる？ なに、思ってる？
眞夜羽「普通。
山羽「普通？
眞夜羽「普通に...だから、普通...
山羽「そっか...ね。
眞夜羽「何？
山羽「疲れた？
眞夜羽「ぼく？
山羽「そ。
眞夜羽「ぜんぜん。
山羽「おばさんつかれちゃった。
と、山羽さん笑い、「じゃ、休憩ね」云って、そして眞夜羽を覗き込んだ顔を上げたのだった。
話を一度切って仕舞えば、我々の誰もが再びそれを継続さす意欲などもはや持っていないことにきづく。自然、此ののちは雑談になって頃合いでお開きとなる。山羽は追って和哉に連絡すると云った。いずれにせよ眞夜羽の眼耳のないところで話し合う必要があろうからである。故、それとなくに明日お店に伺います（和哉の土産物屋）と山羽。
いつでもいいですから、お待ちしてますと和哉。
住職には又折って連絡入れますので、と山羽。
これらは雑談に紛らし紛らしながらの会話である。
四人倶なって離れを出る。両方車の爲車まで見送る。
時に、離れを出て本堂を背に庭を歩く時に頭上、今日一日中の曇りの空纔かに切れかけて、すこし薄らいだ雲を通して月が耀く。
故にか否か、山羽ふと眞夜羽に笑みながらに問う
「海って、...月の海。
「海の月？
「あの海って、何処の海何だろうね...四国の向こうかな？
「違うよ。海の一番そこのてっぺんの眞ん中に、月、浮かんでる海だよ。
「そんなの、あるのかな？

「あるよ。ここにもあるよ。どこにもあるよ。
眞夜羽は邪気も無く云った。わたしたちはそれ以上聞き糺すこともなく棄て置く。
爰に我々は別れた。
　　以上９月５日沙門圓位記
（圓位から久村へ、cc. 香香美）
2019.09.06. メール
今回は９月５日午前の山羽香奈枝女史の眉村家訪問のこと、是、その足で沙羅樹院訪問くださり愚僧に口傳いただいたもを茲に愚僧記。附、そのときの山羽女史と愚僧の会談の次第。
添付資料参照のこと。

（圓位文書Ｂ１）
2019.09.05. 眉村家訪問ノ記（圓位口傳ヲ記）
如是我聞
午前八時半、祇樹古藤記念園より和哉携帯に電話。不通。深雪の番号未知。故眉村宅固定に電話。不在。眉村店に電話。眉村一重が応対。和哉深雪ともに今外出中、深雪は買い物行っただけなのですぐ帰るだろう、和哉は呼び出せばすぐ帰ってくるだろう。如何するか？
一重答えて、呼び戻し不用。午前九時半頃に宅に伺おうと思うが如何？
山羽答曰、不都合なら折り返し連絡されたし、宜しければ折り返し不用、と。
仍て九時半すこし過ぎた比に山羽単身眉村の店に詣。
その時の印象。
最初は知らず知らずに何やら奇しい雰囲気でもあるものと思っていた。実際に店に行けばこざっぱりと、又、夫妻共に在店し二人ともに昨日の印象に異なり焦燥の氣色の懊悩の氣色もなしと。すがすがしい印象。「全身夫婦で温泉使ってさっぱりしたような」云々（あれが商売人の営業の顔てふ　なんでしょうね云々）。
一重さん以前、古藤園のボランティア新年会に協力数度戴いていたらしく挨拶される。このあたりのイベント等必ずしも山羽の管轄ならずて山羽に其の時の記憶なし。お茶をにごす。
一重店の留守番。店は閑散。平日、夏休み明け、因ってやむなし。
山羽、和哉、深雪で面談。場所は奥のお茶の間。店内の風景筒抜け。必ずしも狭くない。デスクトップパソコン一台、つけっぱなし。ノート型、閉じて二台。その他、本棚に他の各地の観光案内の本、パンフレット等多数。
まず山羽が夫婦に問て云。
問。今朝眞夜羽はどうだったか。
答。（和）又前日に同じくに起き出し今日は家の裏庭山肌の柿の木に登って茫然自失してをるを深雪の見つける。
問。ここに眞夜羽は善く來るか？

答。（深）毎日來る。ここに返ってきて、それからおばあちゃんか自分が連れて一緒に帰宅する。
問。ここで游んだりは？
答。（深）学校が休みの日などは。
問。眞夜羽、趣味は何か？
答。（和）一般的なもの。特にこれというものなし。（深）テレビで大人のドラマが好きである。内容がわかるのかと尋ねる。憤ってわかるよと答。故問、じゃ、この女の人、なんで泣いてるの？ 答え、ばれたから。問、なにがばれたの？ 答、此の人の夫、ころしちゃったのが。問、なんで殺しちゃったの？ 答、悪いやつだから。問、なにが悪いの？ 答、悪い事、怒って、いっぱい謂うから。やなやつだから。アウトラインの理解。金銭横領等の詳細は未理解（是は刑事もの）
問。他には？
答。（和）ゲーム。
問。どんな？
答。シューティングゲーム等。
問。何で？
答。スマートホン。
問。眞夜羽のか？
答。小学校の二年に上がった時、念の爲眞夜羽にはスマートホンを持たせてある。これは万一何事か起こった時の GPS 捜索等考えた爲。抑此の是非には夫婦で意見が割れた。
問。どう割れた？
答。スマホ所持について夫は否、妻及び祖母は是。
問（深に）。子供にとってスマホはあぶないと思わなかったか。
答。家にいる時は自分が管理している。外出時だけ持たせることにしている。
問。保管場所はどこ？
答。自分のバックの中。
問。ひとりで翫ぶようなことはあるか？
答。ない。
問。インターネットは？
答。まだ自分でうまく打ち込めない。時にアニメの情報等自分が検索して開き見せてやることはある。自分で検索・アクセスしたことはないだろう。
問。小学校に毎日通っている。友達もスマホを持っている子は多いか？
答。詳細は知らない。持たせている親は持たせている。観光の島の爲、外部者多く、実際には何が起こるかわからないから。
問。みなそうなのか？
答。仲間内では念の爲そうしている。
問。他になにか趣味はあるか？
答。特に目に付く物はない。スポーツがすきだが、年の比から未だスポーツのかたちにもならない程度の遊びである。サッカーとバスケット。
問（二人に）。あなたにとって、どんなお子さんですか？

答。（和）基本的に素直だがときどき偏屈になる。頭が固いと思う時がある。（深）傷つきやすい。他人の身の上に同情共感が甚だしく自他の区別がついて居ないところがある。
問（深に）。どんな？
答。ともだちのおじいちゃんが胃の切開手術をした。手術とはなにかと聞かれたのでそれとなく教えた。そうしたその夜眠れなくなった。聞けば、おなかを切ると痛い、血がいっぱいである、痛くてしんじゃうくらい痛い、云々と怯えていた。
問。何歳くらいの時か
答。小学校の一年の時。夏休みの比。
問。聞きにくいが念の爲。夫婦仲は大丈夫？
答。（和）時には喧嘩する。
問。頻度は？
答。年に一二回
問。眞夜羽の前で？
答。（和）それはない。（深）喧嘩の意味あいによる。単純に痴話げんかのようなものならそんな頻度だし子供の前では出さないように気を付けている。しかし商売についての意見の相違はやっぱりある。その論議しあうところを口喧嘩といわれたらそう見えるのかも知れない。又、近所の人々の悪口は知っている。愚にもつかない僻んだ噂である。
問。なぐりあったりする？
答。（深）ぜったいにない。（和）いちどだけ、あれは眞夜羽の生まれる前だった、頭を叩いたことがある。
問。商売上の議論の頻度は？
答。（和）頻繁に。あくまで仕事に関してだから仕方ない。（深）多いときは毎日（繁忙期）。暇な時は一か月に一回もしないとか、頻度はばらつくのでどのくらいとも言えない。
問。眞夜羽の学力は？
答。（和）普通。
問。それについてどう思うか。
答。（和）まだ早いが時期が来たら塾に通わせるなりした方がよい。（深）いまはそれどころではない。仮になにも無かったとしても、のびのび大きくした方がいいだろう。それより自分のやりたいことを早く見つけた方が生活はよりはやく安定する。
問。将来、どんな子になってるのと思う？
答。（和）アーチスト。
問。理由は？
答。いまの現状をいってるわけではないが、それ以外にも何か鋭いな、人と違うなと思わせるところがある。
問。例えば？
答。詳細は覚えていない。
問。奥さんは？
答。（深）考えられない。出来れば医者などがいい。
問。なぜ？
答。医療がつぶれることはない。土産物屋等、たとえば（ここに原発はないけれども）福

島のような災害があった場合、観光業はもろい。瀬戸内海に津波など起こりようもないが、なにがリスクで、どこにリスクがあるのか、起って見なければわからない。故、常に不安である。
以上。
つぎに山羽が夫婦に語りて云。
比呂斗転生云々の件
額田比呂子比呂斗親子の件、そもそも和哉もこの人たちの情報をネットから見つけた聞いて居る。事実か？（答、然）故、眞夜羽もそもそも友達とスマホいじりの中で見つけたのではないか？ 又額田の名字は希少。且つ額田王に同じ。且つこの名は奈良の観光パンフレット等で万葉の旅云々とあれば容易に目にする。且つ、此の店は土産物屋で、あなたがたも色々な観光地の情報収集をしておられるようだ。故、どこかしらで目にしたキーワードからひっかかったのが無意識的に印象に残ったのではないか。
所謂顔の妄想の件
亡くした祖父のイメージである。これに関して語る時眞夜羽の言い方はとかく難関・晦渋、即ち死という事態が未だ消化不良なのだ見える。故、いまのところ放っておくしかない。
睡眠時遊行の件
アルコール・薬物に起因する用例を除けば一般的に高ストレスの時又興奮したまま睡眠した時等に見える。蓋、轉生妄想等の爲、及び職業上の論議を口論と誤解した爲等潜在的に緊張の解けない爲なのではないか。その點注意し子供の前で仕事の話は避けるべき。又、転生の妄想自体なんらかのストレスの代替であるのかもしれない。例えば祖父の死とその事態そのものへの未理解による不安等。
転生妄想の件
抑々死んだから転生するので、此処でも祖父の死の影響を思わせる。理解できない祖父の死を自分の身に体験させ、そこからの復活（転生）によって祖父の不在の不安を解消しているように思われる。
補遺として
例えばオカルト・ホラー映画等創作に於て子供は非常に効果的に用いられる。フィクションに於てだいたい最初にお化けに触れ合うのは子供である。所以は即ち子供が真顔で語ったことをおとなは真に受けがちだから、である。この点、大人は注意すべき。子供は自覚なくして往々に嘘をつく。子供の嘘乃至妄想を鵜呑みにすれば家族全体が同じ妄想に影響される事を結果する。故、アドバイスとして言う、子供の言うことを信じ過ぎないことだ。思うに眞夜羽は空想的で、話しながら空想を展開する能力が高いように思う。また、一般的に子供は大人の顔色を見大人の期待に添いながら、話しながらに話自体を造って且つその自覚がないどころか自分の話したことを信じ込む傾向あり、この點、眞夜羽には特に顕著に見える。故、一層その点注意すべき。
以上、説いて聞かせた。
深雪は納得し、和哉氏もうすこし腑に落ちない様子だったとのこと。
また何かあれば連絡するよう言っておいた、とのこと。
（圓位文書Ｂ２）

愚僧「それで、事はおちつきそうですか？
山羽「わたしとしては以上が真相だと思うので、それ以上には出来かねる、というのが実のところで...
愚僧「あの夫婦、どうだった？
山羽「おふたりが悪いのよ。
愚僧「なぜ？
山羽「自分の子供に怯えちゃって。
愚僧「そう思う？
山羽「そうじゃありませんか？ あれじゃ、子供が図に乗る。自分の妄想を妄想として切り離せなくなる。子供さんよりもしろ親の方が妄想を信じてる。だっていちいち岡山の茨くんだりまで行ったんでしょう？ 姉妹施設あるから行ったことあるけど、結構陸の孤島だからね、あそこも。...だから駄目なんですよ。子供より親の方が心配。子供は話の上手ないい子ちゃんじゃない？ いろいろあるのかもね。
愚僧「いろいろ？
山羽「夫婦間、嫁姑、母子間。ちょっと、作り物っぽかった。特に息子さんの方、ご主人、あの人、いろいろ現状を打破したいんじゃない？ どんな現状か知らないけれども。これはカウンセラーの先生に懸かってみたら？ あそこのストレスだのルサンチマンだのなんだの、それが眞夜羽に虚言言わせてる気がする。大好きなパパを喜ばせる爲。注意したげた方がいい。
愚僧「彼等？
山羽「旦那のほう。あれ、その中爆発したりして。
要点は以上。
　以上９月５日沙門圓位記
（圓位から久村へ、cc. 香香美）
2019.09.06. メール
たてつづけに何度も、と、そう思われるでしょうが。
ここでは私からは何も申し上げない。
下のファイル、ご一読されたし。昨日、といいますか、今朝、夙夜の記。

（圓位文書Ｂ２）
2019.09.05.
感覚的にはその前日、４日の深夜、という実感なのですが。とまれ。
沙羅樹院夜、離れの自室に就眠。
ものの氣配あり。
目を開くと昏がり。
匂いあり。髪の香か。
開いた目に漸くに物覩る事に馴れた感覚兆し、視界の左を掩う翳りのあるのに気づく。
みれば翳りは翳りで誰とも見定め得ず。
夙夜故。

恐らくは女、かたわらに添い寝し就いた片肘に身をもたげ愚僧を覗き込み見るものか。
心あたりなくて惑うともなくに恠しむ内、耳、笑い声を聞く。
女のそれ。
軈て女の聲云いけらく、起きましたか？
愚僧答えけらく、どなた？
女の聲云いけらく、判らない？
愚僧默止
女の聲云いけらく、さっき、お会いした、...
愚僧默止
女の聲云いけらく、忘れる、ひどくないですか？ と、女の聲にすでにそれ先の眉村深雪さんとは既く気付いており。しかれどもそれと信じられずに思いあぐね、しかれども終に愚僧、云いけらく、深雪さん。...眉村の...
女の聲云いけらく、判った？
女の聲に有歡びの色、有嘲弄の色、有無邪気の色）
愚僧問いけらく、何をしてられる？ と、身を起こそうとして起こし得ず、時に気付くに女の片太もも愚僧の腹をまたいでかぶさり、それを自然、阻害した由。女、子供に添い寝する様頭に胸脇あたりを位置させて場所取り、図体大きい子の體に足投げたる由。
愚僧問いけらく、今、何時？
女の聲答えけらく、まだ、あの子、起き出さない。
愚僧云けらく、あの子...
女の聲云いけらく、眞夜羽。
愚僧問いけらく、眞夜くんは、今日も？
女の聲云いけらく、たぶん、もうすぐ起き上がって、歩き出すんじゃない。
愚僧問いけらく、それで、あなたは
女の聲答えけらく、さきに、起きて、待ってるの。
愚僧問いけらく、でも、じゃ、なぜ、こんなところに...
かくて女の聲、語りて曰く、
言わなきゃいけない事あったら、...に気付いたら、...で、眠れない、...じゃ、ないけど。やっぱり、相談しといて、して、それで、どうかしろって、謂って、で、まだ言わなきゃならない事あるの、...それ、
愚僧問。秘密？
女ノ聲曰、秘密って？
愚僧問、隠し事...あなたはまだ、
女笑う。
女ノ聲曰。ない。ないけど、思い出した。...秘密？、...では、ない。
愚僧問。なに？
女ノ聲曰。知ってます？
愚僧問。なにを？
女ノ聲曰。眞砂のお父さん、
愚僧問。おじい様

女ノ聲曰。だれ？
愚僧問。だから、眞砂の...眉村眞砂。あのこのおじい様。
女ノ聲曰。あれ、お父様。
愚僧問。和哉さんのお父様。
女ノ聲曰。眞夜羽のお父様。
愚僧問。あの子の？
女ノ聲曰。知らない？
愚僧問。なに？
女ノ聲曰。知らない...
愚僧問。なにを云ってられる？
女ノ聲曰。眞砂のお父さん、私に生ませたの。それ、眞夜羽
愚僧問。うそでしょう？ あの方は...
女ノ聲曰。眞夜羽もそう云ったでしょう？
愚僧問。いつ、そんな
女ノ聲曰。昨日...
愚僧問。あの、会話？
女ノ聲曰。あれ、本当。
愚僧問。なにが、...何がどうなって、...あなたは...
女ノ聲曰。眞砂のお父さん、あの人、全部嘘。いい人で通ってたんでしょう？ あれ、島でだけ。岡山にも女居たじゃない...たぶん。呼ばれもしないのに岡山の親戚の處行くとか、昔の同級生に逢うとか？ それ、うそ。
愚僧問。なんで、知ってるの？
女ノ聲曰。私？
愚僧問。なんで？
女ノ聲曰。知らない。感づいた。たぶん奥さんも、一重のお母さんも知ってるのよ。で、あんなに僻んでるの。性格曲がってるでしょう？
愚僧問。必ずしも、それは一般的な印象じゃない。
女ノ聲曰。なにそれ？
愚僧問。あなたの個人的な...
女ノ聲曰。知ってるの？ 知らないじゃない...あれ。時々鼠煞すの。
愚僧問。鼠？
女ノ聲曰。虐めて弄んで。...山の中だから。自然野鼠いるでしょ。だから、ネズミ捕り、...昔から使ってる、なに、これ、戦前の？ みたいなの...帝國害獣駆除會社とかさ、そんな名前の刻印でありそうなの。あれ、...捕まえたら。さんざんいたぶって...
愚僧問。そう見えるだけじゃなくて？
女ノ聲曰。見てないから。住職さん。...あのひと、歪んである...旦那がああだったから。
愚僧問。とまれ、あなたは...
女ノ聲曰。知りたい？
愚僧問。何を？
女ノ聲曰。教えてあげる

愚僧問。何？
女ノ聲曰。六年前...違う、七年...八年前、結婚して。こっち来たでしょ...島。で。
最初は善かったけど。...あの人、...眞砂のお父さん。...知ってる？
最初は何でもなかったけど。...あの人、知ってる？
眞砂のおやじ。...あれ、六月。...雨。梅雨の。
その日、わたし、四時。夕方。歸ったんです。家に。食事の支度とか。雨だし。
だから、遅番、あの二人。和哉さんと、お母さん
愚僧問。一重さん...
女ノ聲曰。眞砂のお父さんと一緒に歸ってきて...足、いためてて。
愚僧問。足？
女ノ聲曰。山途で転んだの。本当に？ 嘘じゃない？ あれ。...それも嘘だった？
愚僧問。それで？
女ノ聲曰。聞きたい？（と、女は鼻に笑）一緒に。かえって...で。わたし、忙しいじゃない？ だから...
愚僧問。家事？
女ノ聲曰。最初、洗濯。和哉も眞砂の父も、店の仕事なんて何もしない...たまに、何？ あれ。ガイド？ 游んでるだけ...
で。夜洗濯して、夜のうちに部屋干して、朝、外に...あれ、なんで？ 宗教？ 島にそういうのある？
お母さんの流儀。...無意味。...おかしいの？
そしたら、うしろから。
愚僧問。眞砂さんが？
女ノ聲曰。いきなり。
愚僧問。どこで？...そんなの、...どこ？
女ノ聲曰。リビング。あの、穢っない絨毯敷いてる...あれ何年前の絨毯、あれ、...
愚僧問。聲、出せば...
女ノ聲曰。聲？
愚僧問。山倉さんでもなんでも、すぐ聲、大声、だせば、聞こえて...
女ノ聲曰。無理。
愚僧問。無理？
女ノ聲曰。無理。
愚僧問。何で？
女ノ聲曰。無理。わかりません？ 父親でしょ。假にも。義理の父に襲い掛かられて、大聲たてるの？
助けて主人の父に、主人の父に...って？ それからどうなるの？ わたしたちどうなるの？
愚僧問。堪えた？ だから、あなたは、堪えた、と？
女ノ聲曰。そこまで考えない。考えられない。だって...理解できない。...だって。ほら。頭の中、真っ白ですよ。
綺麗に...完全に...
わかります？

眞っ白ですよ...
愚僧問。...堪えた。
女ノ聲曰。堪えはしない。逆らえなかった。
愚僧問。...義理の父だから？
女ノ聲曰。じゃなくて、暴れたら殺されそう...
愚僧問。怖かった。
女ノ聲曰。別に。...だってもう、そんなレベルじゃない。
愚僧問。じゃ、
女ノ聲曰。されるが儘...
愚僧問。それで、...
女ノ聲曰。一回だけじゃないのよ。何個...いったい、...
愚僧問。そんなに？
女ノ聲曰。数えきれない。
愚僧問。よくばれずに...
女ノ聲曰。その日。...だいたい、歸ってくるの七時だから。店、６時に染めて...レジ閉めて...
その日、お母さんだけ返ってきた。七時過ぎ。...和哉飲みに言ったって。お母さんの顔みたときも泣きそう、けど
その話聞いて。...いや、別に。知らないからね。だから...
でも。和哉への愛情全部醒めた。かわりに、眞砂のお父さん、いとしくなった。
可愛くなって...なんで？
あれ。なんで？...わたしまでこの人裏切っちゃ可哀想って...なんで？
あれ。...
あいつ、犯罪者じゃない？ 違う？...あいつ何時に歸ってきたと思う？
愚僧問。何時？
女ノ聲曰。十時。べろべろ。佐久間の左官屋の家、あそこでお呼ばれ。...馬鹿だから。でもたぶん、もし普通にあの日、普通に却って来てたら、たぶん、わたし、みんなの前で泣き崩れてましたよ。
心、せき止められなくて...けど
愚僧問。じゃ、それから、赦してたの？
女ノ聲曰。赦す？
愚僧問。眞砂さんを。
女ノ聲曰。まさか？
愚僧問。じゃ、
女ノ聲曰。愛しい。愛してない。主人じゃないあから。愛人？ やめて。
そういう女じゃない...飢えてない...断れない。断る気も無い。悪いから。
彼に...可哀想...
罪の意識。悪いから、やってること、全部悪だから...赦さない...許せないから...恨む。いじらいしい。自分も。憐憫？
自分さえ恨むけど。...でも

愚僧問。可哀想？
女ノ聲曰。愛しいから。彼だけは私をわかってくれる...けど生理的に無理だった。
愚僧問。じゃ、断れば。
女ノ聲曰。無理。
愚僧問。なぜ？
女ノ聲曰。だからいろんな意味で無理。本当嫌だった。眞砂のお父さん死んで、すっごく、樂になった。
愚僧問。嬉しい？
女ノ聲曰。哀しいよ。本気で泣いた。...泣きじゃくった。眞夜羽も泣いてたけど、あれ、私の真似したのよ。...お母さんがそうするからそうする...そもそもあの子、眞砂さんなんかもう忘れちゃってるくらいで、それがホント...眞砂さん、なんにも...
あやしてやりさえしなかった。
愚僧問。放ったらかし？
女ノ聲曰。本当に、...
愚僧問。でも、孫じゃ...
女ノ聲曰。ないから。自分の子供だって知ってるから。心咎めたの？ あれ。
愚僧問。じゃ、和哉さんとは？...なかったの？
女ノ聲曰。あった。
愚僧問。じゃ、わからないでしょう？
女ノ聲曰。わかりますよ
愚僧問。なんで。
女ノ聲曰。似てるでしょう？
愚僧問。眞砂さんに？
女ノ聲曰。そっくり。私メインに、あの人載せたらあれ
愚僧問。隔世遺伝って言って
女ノ聲曰。関係ない。...事実としてそう、で、
愚僧問。それからは？ 一度や二度じゃなかったと、
女ノ聲曰。生まれてたらも。当然。生まれたあとも
愚僧問。じゃ、
女ノ聲曰。妊娠？
愚僧問。しなかったの？
女ノ聲曰。した。何回も。下ろした。全部。
愚僧問。なぜ？
女ノ聲曰。なぜ？
愚僧問。どうして？ 最初の子、...眞夜羽生んだ、次の子、でも、こんどこそ和哉くんの子供かも、
女ノ聲曰。もういや。
愚僧問。なんで？
女ノ聲曰。みんなの冷たさ判ったから。
愚僧問。誰の？

女ノ聲曰。眞砂さん...あの、自分の子に、あれ、なに？ だから全然なつかない...
愚僧問。でも、
女ノ聲曰。お母さん。和哉。みんな...あれ、全部嘘。
愚僧問。じゃ、
女ノ聲曰。妊娠したら、その度に広島で、...廿日市で...あれ。何個下ろした？
愚僧問。そんなに？
女ノ聲曰。そんなに。
愚僧問。それでも堪えたの？
女ノ聲曰。絶えた？
愚僧問。なにも云わずに...
女ノ聲曰。絶えるって？
愚僧問。...我慢する。
女ノ聲曰。なにそれ。もうそういう意思の問題じゃない...
愚僧問。ちょっと待って
女ノ聲曰。なに？
愚僧問。あなた今...
女ノ聲曰。何で知ってるの？ 見たの？
愚僧問。一重さんが喜んで、それはもう...だから下で逢った時も喜んで、私にも、
女ノ聲曰。嘘。
愚僧問。それは和哉さんの？
女ノ聲曰。死んだからね。死んで射精する亡霊いるの？ いたらやだ...
愚僧問。でも、あなたもうれしかったでしょう？
女ノ聲曰。眞砂の父、死んだとき？
愚僧問。妊娠した時。
女ノ聲曰。なんで？
愚僧問。ようやく、間違いなく和哉さんの...
女ノ聲曰。意味ある？
愚僧問。意味？
女ノ聲曰。和哉の子供、喜ばなきゃダメなの？
愚僧問。いや、
女ノ聲曰。じゃ、私何なの？
愚僧問。あなたは、
女ノ聲曰。なにそれ。莫迦にしてる
愚僧問。あなた思い違いしてる
女ノ聲曰。関係ない...おろしてやろうか？
愚僧問。まさか
女ノ聲曰。どうする？
愚僧問。それは、健康に気を付け、くよくよせず、悩まず、元気な
女ノ聲曰。で、元気なのうまれた、と、して、...どうする？
愚僧問。どう？

女ノ聲曰。顔、又眞砂と同じだったらどうする？
そう女の聲は云った。
女は默止した。
愚僧も默止すより他にすべなくもだし、故、鳥の翅音を聞いた気がした。
是は聞きちがいだろう。まだ早い故。
未だ夙夜。
女云いけらく、行きますよ、と。
愚僧問いけらく、行く...と、したらば女答えるにそろそろ歩きだすから。
女は云う、あの、眞砂の子供が、ひとりで歩きだすから。
云って、謂い終わらぬに聲を亂して笑い笑いの聲は女の聲の語尾を乱した。
立ち去るのは一瞬だった。
襲われかけた、それこそ鼠の逃げるようにも身を翻し、襖を叩き開けて消える。
足音を聞く。
愚僧老体（已に九十前也）の爲、寝姿から起き上がるのに苦労す。
此の日も。
故ようやくに聲あげなら起き上がって立てばあけ広げの衾の向こうに人影なし。
離れ裏の樹木に鳥数羽。
鳴く。
すでに日は明け染め、空、明るんで朱を曝すやらん。
樹木翳る中日昇見せぬに視野に物の影あかるみ顯らかになりゆく。
ひとり、愚僧、一家の行く末案じをり。
事の次第以上。
山羽さんにはこのこと謂わず。何故？...云った方がよくも思い思いしつつ、言いだしかねつ。
又今案ずるに、深雪さん山羽女史云うところの眞夜羽の妄想にひきずられ妄想し妄想にとらわれたものか？
誤解なきよう附言、
件の眉村眞砂氏、誰に聞いても善良と答えるべき人と爲りの人。
間違っても深雪さん云所の一件、事実とは承服し難し。
ただ惱ましき。
又今朝がたも深雪さん寺に來るか否か案じてをったものの今朝は彼女來たらず。
其の事確認しをはり爾乃今記しき。
　以上９月６日朝。沙門圓位

文書 8

# 文書８

（文書８）
記。
布琉輸伎波
迦都曾祁奴良志
阿志飛伎腦
夜魔能多伎都世
於登摩沙琉那利
２黄いす儘ココココ２淤鵜もののココココ２追消去故ココココ不２王Ｏココリ
古游季齒勝蘓不消去螺四蘆疋山滾津生不響瑠儺驪
私記。

○
雑部（QK）
（久村-　迦賀三）
2019.09.08.Line 文字
瞿村。
　いまどこ？
鏡見。
　なに？
九無囉。
　いま大丈夫？
伽伽彌。
　大丈夫
玖叢。
　お前さいきん絵かいてる？
屈身。
　かいたね
　さいきん
　何？
句務蓙。
　売った？

果蚊美
　いや
　なんで
久村。
　そもそも円位さん知ってる？
鏡。
　知ってる
　お前教えたでしょ
久村。
　連絡してる？
鑑。
　メール
久村。
　俺教えてないよね
　なんで？
久村。
　だれに聞いたの？
香我美。
　HP
　寺の
　書いてるでしょ
久村。
　それか
香香美。
　それでぐだぐだと？
Q
　俺のせいになってる
　おれがおしえたって
K
　似たようなもん
　それだけ？
Q
　白雪
　あれもおしえた？
K
　そ
Q
　坊さんに
Q
　おしえたの

K

なんで？

Q

なんでおしえたの？

K

問題ある？

Q

いつ？

K

どう？

しらゆき

Q

別に

Q

いつ？

Q

しらゆき？

K

あいつらどう？

Q

相変わらず

ぐだぐだと

K

なにしてる？

Q

坊さん根掘り葉掘り

Q

ひまだからね

Q

たぶん

K

ぐだぐだね

笑うしかない

K

そんなに？

Q

ぐだぐだ

K

坊さんそんなに興味あるの？

Q

　ぽいね
K
　あのひとは？
Q
　相変わらず
　帰ったら会ったら？
K
　いまさら？
Q
　待ってるよ
K
　まさか
Q
　おまえのことききたいらしい
　いろいろ
　興味あるみたい
K
　なにそれ
K
　それあのひと？
Q
　坊さん
K
　それね
Q
　いい？
K
　すきにして
Q
　 OK

○
（久村から香香美に）
2019.09.09. メール（恐、圓位に送信の後送信）
　添付、確認して。
　じゃ。
　　久村

（久村による文書。香香美について）

以下、知る限りの事です。
香香美清雅氏
1974 年生。月日は忘れました。ご興味あれば本人に聞いてください。すぐ答えると思います。性格的に。
出身東京。
代々木の方です。
幼い頃転居しています。
母親一人に育てられたようです。母上のお名前は香香美香耶子。漢字は間違っているかも知れません。かやこさんです。
本気になって調べれば古新聞に出てくるかもしれません。彼が十二歳の時に亡くなってるので。その時の記事で。
母親は香香美曰く彼の手で殺めたと。理由は母親の男関係への嫌悪（是は私の推察です）。
此の時香香美氏カウンセリングさまざまにたらいまわしにあったようです（これ等は香香美氏からさまざまな折に様々に聞いた話の断片から推測したもの。かならずしもさだかではありません）。
いずれにせよ意思錯乱状態と認定、又少年犯罪の爲（ということだと推測）不起訴。
資産家の（某有名タイヤメーカー子息）阿波元方氏が引き取る。此の方、母上の恋人だったようです。
このあたりの精神風景、私には判りません。彼に逢う前ですから。
色々あったようですが、帝東大学に入学。ここで私と逢いました。尤も香香美氏幽霊学部生。
阿波元方のご意思だったようです。
此の頃にストリート・アートを始めて。ゲリラ・ペインティングですね。
国会議事堂の正面門入った所にスプレー書きしていて捕まったりしていますね。此の時罰金拂ってます。原状回復費の名目でしたか。
大学時代にホストのバイトをして居まして、そこで逢ったやくざがらみの人間に紹介されたのが、例の王黄　氏です。
自稱中国人。見かけはそんな感じです。ただ、中国語を話しているのを見たことがありません。尤も、中国人だけだったときには使っていたのかもしれません。曰く、元々満州生まれだったと。
経緯財源はしりませんが赤坂中心に不動産物件を運営などしていたようです。その他中華レストランとか。横浜等に。
彼が運営していたのが件の白雪革命集団です。尤も、国家理論、經濟理論等云々する言論サークルのようなもの。
ここに居たのが件の浩然。これ、ご指摘のように男性名です。ただ、お美しい女性です。いまももちろん存命中。
噂では黄　氏が日本人内縁の妻に生ませたとか。詳細未詳。
白雪革命集団は今もあります。
今の運営者はその浩然さん。
香香美氏、その頃から精神科に何度かかかっています。不安定なところがあって。大き

な事件は起こしてゐません。
香香美氏、アート活動の方で非常に（一部で）有名になった、と。ポップアート、ゲリラアート的なものです。グラフィック・アートというやつですか？...スプレーで落書きする、あれです。
けれどもたしか 26 歳くらいまででしたでしょうか？
わたしが未だ大学院の博士課程に居た比に活動を停止。実質的な活動期間は５年にも満たなかったように記憶します。一部で「失踪」と呼ばれました。
ただ、これは批評家等の批評的言辞の詞の綾に過ぎなかったものが今や（インターネット時代になって）本当にランボォだのなんだのみたく失踪した風な誤解を呼んでいます。本当にどこか遠くの砂漠にか密林にでも姿をくらましたとか、そんな。実際には彼は東京にいて、女に喰わせてもらっていました。
そうとうの美形の爲。
本人は同性愛者。女も抱いてやるよ程度のバイセクシャルということなのでしょうか？
十年近く前に渡越。理由は知りません。わたしにはちょっと行ってくる程度の言い方をしましたが。
そのころ、未だ日本にはベトナム人も溢れて無くて、イメージとしては映画「地獄の黙示録」等のイメージしかわたしには在りませんでしたから、そろそろ本気でアジアの奥地に王国でも作る気になったかと。もちろん、笑い話ですよ？
絵画は辞めてから、発表もしないセザンヌの模写（？）ばかりです。
時々日本に帰ってきます。帰れば、そして彼の方で気が向けば会いますが。
私の知ってることは以上です。
追記、私も白雪集団にかかわってます、...いました、が、是は香香美氏の紹介によるものです。今の活動については正直なところあまり詳しくありません。時に例の浩然さんと茶を飲んだりするくらい...茶道華道諸書道、そのあたりなんでもこなす方なので。...
　　久村優人

○
（久村から香香美に）
2019.09.10. メール
嚴島の坊さん、いろいろ嗅ぎまわるから。
やり取りを一応ながすよ。
添付見といて。
原文はメール。
では
　久村

（圓位から久村に 2019.09.07.）
９月に入っても相変わらずの天候不順。いかがお過ごしでしょうか？
ひとつお伺いしたいことが御座います。

本日インターネットで見つけたのですが、なんでもカンボジアのプノンペンでポール・セザンヌの水浴画の未確認の大物が発見された云々。
鑑定に回されいま確認中だとか。
記事を読む限り絵のモティーフは一見眞筆に見得るが細部に関してあやしいところもあり多くの関心を集めている云々（私が拝見したのは AFP の記事です）。
ご確認いただけませんでしょうか。記事に一応その絵の画像も張り付けてありました。（※リンクあり）
是、愚僧思うに件の香香美氏の筆によるのではないかと思うのですが、彼をよく知るあなたの眼にいかがでしょう？
少し、興味が御座いました爲。

（久村から圓位に 2019.09.07.）
興味深く拝見させていただきました。
画像、何分粗いので...あれ、本物は相当大きいものなのでしょう？ ですからはっきりとは断言できませんが、そうなのかも知れません。
彼がそんなふうな絵を（つまり、水浴画を、ということですが。セザンヌ風のとか贋作としてのとか、そういう話をは聞いて居ないのですが...）描いているのは事実です。
それがこれなのかもしれません。
彼は所謂「失踪」してからさかんにセザンヌの水浴画の模写まがいの試作を描き散らしていました。それにも似ているし、もとが...云っては彼に失礼ですが、それら一連の試作はすくなくとも理解不能な「作家的狂気」による哀れな「作家性の」脱線ないし頽廃としか我々の眼にはうつらないもので...ですから、...どうなのでしょう？
もともとセザンヌの模倣に過ぎないのでしたからセザンヌの贋作が現れて似てるか似てないかと云われれば似ているに違いありませんが...
又、戴いたリンクの記事もどうも素人すじの記者のペンなんじゃないですか？ 曰く顯らかに技法に関してセザンヌ本人とは思えないものがある、但し最晩年に新しい技法を使って試みた可能性も否定出来ない...これ、なんかの美術史家さんの意見として引いてますが、はっきりいってこのあたりの作家の作品に関してはもう既にカタログ化されていて、さすがに今更最晩年に新技法を使い始めたという新事実があかるみにでるなんていうことは普通考えられません...日本の古寫本のようなものしてから既にカタログ化され系統整理されています。まして 20 世紀のセザンヌのような世界的人気作家の一枚何億円の作品に対してなにをかいわん、と。
何にしても手の込んだ贋作商売というのが関の山か、単に愛好家が自分で作った趣味の一枚が曲がり間違って世を騒がせたのか、それとも香香美氏の筆なのか。ひっとして、贋作一味の片棒を担いでいることだって考えられなくもない。
どうなんでしょうね？
まとまりない文章、羞じ入ります。いずれにせよ、香香美がむかし書いていたのに似ている。けれど、元が模写なので贋作又は真作とも似ていて当たり前、と、そういう曖昧な結論しかだせません...

久村優人

（圓位から久村に 2019.09.08.）
たびたび失礼いたします。愚僧、終日ちいさな島の鄙の寺に引きこもっておりますので、どうも手持無沙汰で困ります。
昨日のセザンヌの件ですが、あれからいろいろと見たところもうすこし細部を移した画像が見つかりまして。
文章はおそらくフランス語なのでしょう、ですから恐らくは佛語圏のウェブサイトということなのでしょう、こちらなら或る程度の細部まで見る事が出来ます。
（※リンクあり）
愚僧個人的に想いますに、是は香香美氏の手による作なのだろうと。ここで気になるのが、ならばなんで又カンボジアなんぞで「発見」させたのだろうということですが。自分の作品として、ではなくて、です。
そもそも香香美氏、彼がいきなりにあなたの言う「セザンヌ模写の頽廃」に転向したのは一体なぜなのでしょう？
お忙しいとは思いますが、お教えいただければありがたく思う次第。

（久村から圓位に 2019.09.08.）
お尋ねの件。
むかし、20 世紀クラシックの作曲家でジャチント・シェルシ Giacinto Scelsi という人がいました。一部で非常に有名な人なので、あるいはご存じかも知れもせん。
此の作曲家、イタリアの方ですが、日本ではおもに 80 年代の末期あたりからその名を或る種のいかがわしいカリスマ性をもって弘めていた人だったように記憶します。
簡単に謂うと、20 世紀初頭の生まれ。貴族の末裔だとか。シェーンベルク等の十二音技法に影響を受ける。これはイタリアでは珍しい事だったようです。オペラの国なので。十二音楽、基本的には器楽曲の作曲家の発想でしょう？ わたしも専門ではないのであやしいですが、そういうことだと聞いたことがあります。ともあれ最初はなんとも難解で居心地の悪いピアノ・ソナタなど書いていたようです。これは、むかしある友人の手で（当時香香美と僕が参加していた言論サークルみたいなのがあって、それの友人なのですが）聞かされたことがあります。
香香美とピアニストだけは気に入っていましたが。
作曲はごく初期のころに「精神を病んで」と一般的にいわれていますが、ともかく作曲が出来なくなった、と。譜面を書くことが出来なくなったようです（最晩年のモーリス・ラヴェルもそれで非常に苦しんだとか...）。ところがある日ピアノの一音を執拗にならしつづけ聞き続けることによって癒された、と。これによって「シェルシ音楽」というのが生まれ始めます。
つまり、同じ音のロング・トーンがひたすら續くわけです。
音符の書けないシェルシの作曲法として筆記担当者座らせて自分は鍵盤叩いて口でなんにやら難しく詩的に説明して筆記者がそれとなくに筆記して...みたいな、そういう非常

に不可解な方法で書かれたようです。
それが 90 年代あたりに一種のカリスマを持って遠く日本でも（尤もクラシックとブルースに関しては日本が倒錯的に今や最大のマーケットだという説もありますが）受け入れられたのは、その音楽の響きの神秘的・瞑想的な雰囲気によるのだろうと思います。本場では所謂スペクトル楽派のジェラール・グリゼーとトリスタン・ミュライユも一時影響を受けていたようです。いちいちシェルシのお城まで行って会見したとか。
ところが後に、...日本ではやり始めたとほぼ同時だった記憶があるのですが、これにはゴーストライターがいると。ゴーストライターが全部作曲して、シェルシは単に出来上がりのスコアにサインして金払っただけだと。
ヴィエーリ・トサッティ Vieri Tosatti という、これはこれで現代音楽好きなら知ってる作曲家ですが、此の人がそれを告白したんですね。雑誌に。シェルシの死後に。なんでもシェルシは私だ、というタイトルの暴露記事だったとか。トサッティはもっとまともな現代音楽をきちんと書いた人です。あまり評価されないし有名ではないし、これからも評価されることはあっても決して有名にはならないでしょう。そういう音楽です。
もっとも、シェルシのもともとの作曲法が作曲法なので、それを以て共同制作と解釈する向きも居たり詐欺師の化けの皮がはがれたと騒ぎ立てたり、喧々囂々そんなふうだったと思います。いまや完全に忘れられた作曲家になりましたが。尤もジョン・ケージすら既に忘れられているいま、シェルシなどなにをかいわん、ということでもあるでしょうか。
香香美が特にシェルシに興味を持ったのはゴーストライターつきの自稱作曲家にすぎないというとこが露見してからです。彼曰く、非常に面白いと。曰く、彼は描いた、描かなかった。
彼は聞いた、聞かなかった。
見た、見なかった。
知っていた、知らなかった。
仕掛けた、見い出した。
手を触れた、触れさえしなかった。...とかなんとか。
彼は笑いながら言いました。「すくなくともこうは云える、詐欺師シェルシはそれは自分の作品だと名づけた、とね。どう思う？ 俺もシェルシの音符のように色に色を見させてみようか？ その自分の色を？ 俺の作品として？」
そういって始めたのがセザンヌの模写でした。
それ以外に何の切っ掛けがあたっという譯でもなかったように記憶します。本当に、活動的で現代的で批判的だったひとりの作家の、いきなりの頽廃を僕たちは見ただけなので。ご参考になりますでしょうか？
香香美にはベトナムに連れがいるらしく、そっちのビザが下り次第帰国するようです。お会いしてみたらいかかですか？
久村

以上。
他にもあるけど。大したことない。例えば坊主、白雪について聞いてきた。

なので、あるがまま話しておいた。問題ないだろう？ 何が後ろ暗いわけでなし。
又、こっちに歸る日取り決まったら連絡して。
　久村。

○
（片岡比羽犁- 香香美清雅）
2019.09.10.Line 文字
清
　もうすぐ日本へかえります
　たぶん
比
　たぶん？
比
　帰らないかもしれないの？
清
　かえります
　見た？
比
　なに？
比
　メール？
比
　送った？
　いつの？
清
　昨日ネットで
　セザンヌの絵が発見されたとか
　ネットのニュース
比
　セザンヌ？
清
　ごめん
　二日前かな？
比
　知らない
　見てみるけど
比
　どうしたの？
清

　検索して見て
比
　あなたの？
比
　ベトナムで描いたの？
清
　あなたの爲に書いた
比
　それは嘘だよ
比
　いつ帰ってくるの
清
　もう書かない
　たぶん
比
　帰ったら話そうよ
清
　二度と書かない
　あれで最後
比
　帰ってはくるよね？

○
（片岡比羽犁あて清雅文書。メールに添付）
2019.09.13.
（本文）
　羅睺羅王から耶輸陀羅王へ
　一時中断した挨拶。その再開。
　添付をご確認ください。
　わたしの爲に？
　あなたの爲にも？
　あるいはあなたの爲にこそ？
　空は雨。その馨匂いたち、綺夜宇

文書 9

# 文書９

（文書）
９月 12 日。
いまだにダナンにいる。朝起きてその事実に驚く。
私は６時過ぎに起きた。それからシャワーを浴びて身支度をした。何故？ 友人が來るから。タオ？ 蘭？ その前に日本から友人が來るから。どこに？ ベトナムに。
彼の名は穗埜果。ホ、ノ、カ。彼は彼だから男性。玖珠本。ク、ス、モ、ト。九州から來た。東京で逢った。こっちに来る前に。玖珠本穗埜果。
年齢。逢った時は 19 歳だった。どこで？ 会ったのはどこ？ 有栖川公園で。何故？ ハオ・ラン。浩然。許宇。波乎。比呂。そうわたしたちが呼んだ少女のせい。彼女のせい。あなたが嫌悪する人。あったことも無いくせに。
だから、彼は白雪のひと。
白雪の波乎はその日私を呼び出した。当時の最新型の今言う太古のガラケーで。
今日来ない？
なぜ？
櫻でも見に？...名目は自分で考えなよ。
どこ？
櫻覩る爲なら有栖川？
公園？ 松濤公園は？
有栖川。...お前がそういうなら、有栖川。
波乎はそう云って笑った。
だから時は三月。
雨の無い儘空は曇った。白かったから。だから櫻の花さえ白かった。波乎はひとりの青年を連れていた。櫻など見向きもしない儘、そして波乎は彼を紹介しもしなかった。
あなたの嫌悪する波乎は、それでも時に途切れがちに笑った。
私も彼女の爲にだけ笑んだ。
玖珠本はひとり笑みさえしなかった。
白雪の青年は不遜な迄に美しかった。眼差しに陰りがあった。なにもかも、彼は彼を害するすべてを厭わなければならなかった。したたる朝の露さえ自分を害することを知ってる彼は、故にまなざしに悪しき棘をしかみなかった。
褐色の肌をいまだ寒い筈の T シャツの下の筋肉の上に息づかせた。
わたしは彼がわたしを盗み見るのを知っていた。

それを波乎が聲にもださずに楽しんでいるのも。
二日後にわたしは彼を抱いた。穗埜果は波乎を恐れた。彼に軽蔑されることを。私は云った。その耳に。安心しろ、と。お前が俺に抱かれる前からすでにあの人はお前を軽蔑しているから、と。
そしてわたしは彼の爲に笑った。
玖珠本が久しぶりに連絡をくれたのだった。いつ？ その前日に。
いま、サイゴンにいる、と。
何故？
観光旅行だよ。
嘘だろ？
実はカンボジアにも行ってきた。
何故？
例の件の準備。
そう。
穗埜果は明日の朝にダナンに着くと書くのだった。
その、フェイスブックのメッセンジャーに。
私は応えた。
なぜ？ と。
決まってる。
なに？
お前がいるから。
わたしは鼻に笑った息を吐いた。それは穗埜果には聞くすべもないものだった。だからわたしはパソコンの前で消える、存在理由さえなくなったその息の痕跡を吹き消した。
彼にもはや返す言葉など無く思えた。
それ、かすかな鼻の息だけが相応しい答えだったから。
わたしは何も返信しなかった。
５時にこっちを出る。
彼はそう教えた。そっちに何時に着く？...逢おうよ。
返さない儘、私はパソコンを閉じた。
朝焼けの斜めに掩う下、バイクで空港に行く。ロビーで彼を待った。
彼の荷物は少ない。
片手にほんの申し訳程度のバッグ。
思えば十年近く逢っていなかった。有栖川の春から数えて数か月後の冬に、私はこっちに来た。
彼は私を見てもなにも聲を掛けなかった。
ただその目にわたしを見た。
変わったね、と。
わたしは心の中でだけ彼にそう言った。大人になった。そう思ったから。
まなざしは棘だけを見詰めるうちに、それがもはや棘でさえないかに振舞う。そんな狡猾さを彼の眼は持っていた。

——そんなに、熱くないね。
穂埜果がささやく。
——思ったほど...こっちは。...サイゴン、カンボジア、あっちは、熱かった。
殆ど会話もない儘に私はホテルに歸った。玖珠本を後ろに載せて。
ベッドに寝転がり、足を延ばす。
わがままに伸びをし、そして媚も無くわたしを見、しばらくの間私を見詰めた。
窓際に、立った私は彼に見つめられた。
——元気？
わたしは改めて、ようやくにおそらくは最初に掛けるべきだった言葉を掛けた。
穂埜果は聲でだけ笑った。
云った。
——死んではいないね。綺余は？
——同じく。みんなは？
——みんなって、誰？
——白雪
——の、誰？
わたしは応えずに、いつか私にかるい軽蔑をさらす彼の眼を覆うように、その傍らに腰かける。
——波乎？
穂埜果が云った。
答えない私に彼は、軈ては吐く息でだけ笑いかけた。
——彼は、永遠に、元気だよ。
——爆弾なの？
私はささやく。
——なに？
——カンボジア？ サイゴン？...爆弾の準備？
——そっちは、中国経由。...梓豪が、
——梓豪？
——知らない？...だね。五年前に...彼が。變ってる。経歴が。もともと新宿界隈のチャイニーズ・マフィアだった父親の子。しかし大卒。台湾に育った。八年前に日本に来た。本職は翻訳家。
——日本語？
——ポルトガル語。
云って、穂埜果は腕をのばし、その指先に私の唇をなぞった。
ささやく。
——久しぶりだね...
——じゃ、なんで？
——なに？
——爆弾準備したんなら...
——まだ。まだまだ。...今からって...早すぎる。...年始。...中国のね。旧暦でしょ。来

年になったら、しだいしだいに。春までには準備する。段取りだけ終わらせてある...量が、大量だから。
——なに準備するため？
——薬剤。クスリ。
——タブン Tabun？
——その生成...日本で試しに作った。...帝東大學の...あそこの教授の工藤さん、知ってるでしょ？ もう 50 だよ。彼。...でも、あのひと、専門家でしょ...じゃないけど、そっち系の...だから、できあがりあまりにも無味無臭で...
——どうするの？
——はっきり毒ガスだってわからないと意味ないじゃない？...別に殺傷目的じゃない。から、匂いがないのはそもそも
——じゃ、
——けどオウムのサリンは異臭したでしょ？ 松本とか。あれ、不純物のせいだよって。工藤さんが...よく知らないけどね。あくまで偶然的なものだよと。知らない。そのあたりの経緯。俺は深くはタッチしてない。ともかく、で、東南アジアあたり、もっと粗雑な薬剤さがせないかと。
——あったの？
——難しいでしょ。日本に運ぶのが。作ればいいんだよ。研究室で。日本の。その不純物っていうのを入れて。不純物入ってさえいれば匂うんだろ？ 匂えば騒ぐんだろ？ 騒げばいいんだろ？ なにが難しいの？ って。...別に、それはどうでもいい。
——なんで？
——実は、お前に逢いに来た。
——だと思った。
——波乎も云ってた...お前に会うんだろって。
——なんて言ってた？
——波乎？...たまにはかえって来いと。
——彼が自分で来ればいい。
——どうやって？
穂埜果は邪気も無く笑う
——また、パスポート偽造して？
ノックがして、その音に玖珠本はすこしの驚きを、眉にだけ見せた。
——だれ？
——紹介する。
わたしは云った。
ドアを開けると、いつものようにタオが媚びた笑みを浮かべた。
——入って。
東の窓の一瞬の逆光に暗んだ目がなれると、ベッドの上に存在するその美しい異国人にタオは身を凍らせた。
穂埜果はにこりもしなかった。
かれは只異国の女二人を見た。

――タオさん、日本語教師。よくしてくれる。...蘭。彼女の妹。
わたしは寧ろタオの引き攣った眼差しを見ながら、穗埜果の爲に紹介するのだった。
何故？ と。
思った、何故タオはことさらにも眼差しを凍り付かせたのか。
あるいは玖珠本のしばしの沈黙はタオの無言の眼の顯らかな不穩のせいだったに違いない。
　おぼえてゐた　おののきも　顫へも
　あれは見知らないものたちだ.....
　夕ぐれごとに　かがやいた方から吹いて來て
　あれはもう　たたまれて　心にかかつてゐる
一瞬、そんな古い詩を思う。なぜ？
知らない。
私の横から斜めに見下ろした傾斜する眼差しに、タオの眼は勝手に霑み、そして黑目がかすかにだけ泳ぎかけ、泳ぎ得ない儘泳ぎかけ、軈て、遂に彼女が瞬くのを見た。
――どうしたの？...と。
わたしがささやきかけ、タオは口走った、...はじめまして、と、其の時にはすでに彼女はバスルームに走り込んでいた。
蘭は自由だった。
その時も。
すでにひとりでたちつくす姉の傍らをすぎて穗埜果の傍ら、背を向けて腰を下ろす。
わたしを見ていた。
バスルームに走る不穩な女の、いかにも不穩な後ろ姿を見送った後の須臾の沈黙に、穗埜果は堰をくずしたように笑う。
云う。
わたしに。
――なに？ あれ。
私は玖珠本の爲にだけ笑んだ。
――知らない。
玖珠本は云った。
――この子も、日本語出来るの？
――蘭？
出来る、とも、できないとも言いかねて、だから、わたしは笑いながら答える
――関係ないよ。...この子は...失語症...預かるんだよ。日中、いつも。あとで、そのうち話す。気にしなくていい。関係ない...
耳に、わたしはバスルームの向こうにタオの嘔吐する聲を聞いていた。
あるいは穗埜果も聞いていたか知れない事だった。
わたしたちには、終にかかわりの事でしかなかった。
そして軈ては涙目にうつむきながら出、わたしを垣間見、そのまま壁の影伝いに部屋を出たタオをわたしは目の端に見る。

タオがいなくなった後穂埜果は私がその傍らに横たわるのを見る。
掩ように肘をつき、そして頬を撫ぜた。
——ちょっと、更けたね。
——ちょっと？
——すこし。
——老いさらばえたね。
穂埜果が笑う。
——お前は老いさらばえない...なんでだろ？ そのうち俺の方が老け込むかもしれない...俺の方が...何年？...いくつだろう？...年下なのに...いまで、俺はお前に追いついた気がする。
——十歳...違う...十五歳くらい？...覚えてる。...桜の木の下で、お前は本当にまだただの子どもだった。
——知ってる。たぶん、つぎにあった時は俺の方が年上になってるよ。
——まさか。
——本当。
——波乎みたいに？
わたしは言って、笑った。
穂埜果の指先が私の鼻筋を這った。
——あれは特別。別の生き物。...化け物だから。
——でもさ、別の生き物だったら、それ化け物じゃないんだよ。例えば、鬼って化け物でしょ？ でも、なら、鬼は人なんだよね。
——なんで？
——人にとって犬は犬でしょ。別の生き物。化け物じゃない。四本足でもあたりまえ。それと同じ。
——彼女は不孝だよ。
——不幸？
——波乎ほど不幸な生き物をしらない。美しく、そして不幸な。考えてみな。例えば或る種の中でもっとも美しいものがいる。それがやがてはその種の滅びを見なければならない。彼等が凡て滅び、たった一人になった時に、彼女の美しさはだれの爲にあるのだろう？ それでもなお、滅び、記憶さえほろびさせたものの最上の美しさをもって存在する事、それは不幸だろう？
蘭が聲を立てて笑う。
思い出したように、そしてだから私たちは蘭を省みる。
それぞれに身をよじって。
蘭は首を曲げて私たちを見、ただ笑う。
いきなり立ち上がって、彼女はバスルームに消えた。すぐさまに水をながす音が聞こえた。だから気付く。慥かにタオは自分の吐瀉物をながすことを忘れていた。
私はそれを、今あらためて思いだす様に、始めて気付く。
蘭は窓際に立って、そして東の海を見た。
逆光のあわい後ろ姿の翳りに、穂埜果がわたしの耳へささやく。

——あのこ、おかしいの？
——なに？
——あたま。
——そ。
穂埜果の指が私の胸を探った。
ゆびさきの温度、そして触感の、脳にのこした形態の痕跡として。
部屋に舞う薄い疎らの塵が、よこなぐりの光に綺羅らぐ。
——笑うよね？
私はささやく。
——頭おかしいのが、頭おかしいのの世話見てやってるの。
——あの子とお前は違うじゃない？
——そう？
——あの子は可哀想な子。お前はただの狂人。
云って、穂埜果がかるく耳たぶを咬んだ。
わたしが彼を抱いたのは、彼の十九歳の三月、あの一度だけだった。
筋肉と、かすかな贅肉の温度の上にシルクを何枚も重ねて、瑞々しい蜜をしたたらせたかの穂埜果の肉体に溺れ乍らわたしは彼に屈辱を感じた。
明らかに。
久村にも、椋尾にも、安河にも、嘉鳥にも、あるいは尾埜にも。
終には感じない明らかな屈辱だった。
玖珠本の前で彼等は穢れ、そして玖珠本の肉体さえもが、その肉体の前で穢れた。
——もう、二度としない。
わたしは云った。
穂埜果は云った。
——逃げるの？
——遁げる？
——違う？
ベッドに身をもたげた彼に膝間つくように、その膝に頬を埋め、顔を上げたその時わたしは穂埜果が詰る色に私を咎める見ているものとばかり思っていた。
穂埜果はただ聲もなく笑んでいた。
ふたたびにその角度の穂埜果に見蕩れかけた時に、彼はひとりで彼の沈黙を殺した。
——教るだけ教えて、逃げる？
わたしはその聲を聞く。
——奪うだけ奪って、弃てる？
目に既に悪戯らじみた色を仄めかせ
——頼んでもいないのに
わたしの額に指先をふれ
——引きずり込んでおいて、それからひとりで
指の纔かの上に口づける。
——放置する。

身を曲げて。
——残酷な人じゃない？
笑う。
——違う？
穂埜果はひとりでわらい、そしてそこに屈託はない。屈辱も。軽蔑も。賢しさも。なにも。
慥かに私は彼に初めての男だった。そして本来彼が同性を愛する趣向のなかったことも知っていた。
——俺をもう愛さないの？
穂埜果はささやく。
——自分が、愛さずにいられないのを、知ってるのに？
——二度と抱かない。
私は云った。
——お前を穢したくないから。
——穢れ？
——精神。...それだけ。ただそれだけがあるべきだった。俺たちはたぶん、生き物を超えた。已に。肉体？ そんなもの...だから、もう二度とお前を抱かない。
わたしは目を閉じ、唇に穂乃果のそれが触れるのを待った。
　するとおまへらは　林檎の白い花が咲き
　ちひさい緑の實を結び　それが快い速さで赤く熟れるのを
　短い間に　眠りながら　見たりするであらう
窓を見詰める蘭が其の時に声を立てて笑う。
窓の見せる晴れ間にいきなり降出した雨に笑ったのだ。
おそらくは。
不思議に思った。雨粒の被膜の向こう、空も海もなにもかも晴れ上がっていた。
次第に窓の向こうを、上の方から白濁が覆い、やがて雨する雲が遠くまで覆った。
目を凝らせばその向こうに晴れた日の沙と海の輝きが未だ見える違いなく、わたしは思った。
蘭の翳りの向こうの白濁に。
穂埜果がわたしを見つめていることは知っていた。
——革命の件...と。思わずささやいた私の聲を穂埜果は聞いた。
——テロ？
——あの件、比呂はどうおもってるんだろう？
——波乎？
——浩然。
——気にしてないよ。...どうせ。王が死んでも涙一つこぼさなかった。嘉鳥が波波伯部を制裁した時も...。
——そう？
——假に人が何人死んでも、何億人死んでも、政治形態がおどろくべき変容を遂げ、すべての王が殺されすべての議事堂が焼けくずれ、或はどれだけ大地が汚れたところで。

例えば放射能に塗れた焦土の上であってさえ涙ひとつこぼさない...
——絶望してるのかな？
——絶望？
——どう思う？
——絶望してるのは、お前じゃない？
——俺？
——違う？
——なんで？
——お前は絶望してるよ。
——かならずしも何を期待するでも何を希望するでも無かった。期待と希望がハレーション起こした末にしか絶望なんてない。信頼してもいないデウス・エクス・マキナ deus ex mchin に我が子の蘇生を願う母親が見いだすもの、そんなくだらない風景が所詮絶望の總てに過ぎない。
——嘘。
——嘘？
——そんなものじゃない絶望をお前は見たよ。已に。例えば六月の雨の中の紫陽花にお前は絶望しただろう？ その美しさに。お前は俺を見て絶望した。俺の餘の美しさに。俺がお前に絶望したように。お前は波乎にも絶望した。自分自身にも。
——そんなに俺を絶望させたい？
——お前はあたらしい王になる。
——それはお前の、...
——俺たちは天皇を殺す。もちろん首相もなにもかにも。国家國體を亡ぼす。ラッキーだった。たまたま日本人で。今、現存するいちばん古い王統だからね。別に彼等に恨みはない。恨むなら俺たちが日本に生まれたことを恨んでもらうしかない。長い王統は途絶え、そして唐突にお前が王になる。
——お前の妄想。
——妄想じゃない。或はすでに現実だから。お前にはもはや関係できない。俺たちはお前を已に王にした。王は狂気している。その王を、だからお前の爲に殺してしまうだろう。お前の安らぎの爲に。王は永遠になる。王は狂人にほかならない。且つ、王は今安らぐ。...
——なぜ？
——なぜ？
——なぜ、そんな妄想を思ったの？
——昔から...いつか、夏。...あの、海、白浜の、あそこでお前が狂気した時に、口走った時に、...自分の事を阿輸迦王、と。...その時。いつかも。狂気したときの、いつもの。
——いつ...？
——覚えてないんだよ。そのとき、思った。王は狂気の人でなければならない。なぜなら、狂気の人は既に王なのだから。...妄想？ そうかな。...違う。妄想じゃない。
——なに？
——愛だよ。たぶん。お前への。

云って、穂埜果はひとりで笑った。
——そうじゃない？ 結局はすべて愛にしか基づき得なかった。所詮は...
——愛？
——そう。それだけ。破壊すら殲滅すらなにすら。所詮は。すべては愛に...
あなたの爲に言っておくなら、わたしたちはその日、いつもと同じように肉体をは交えなかった。僕たちに既に肉体など滅びていたから。ぼくたちに肉体など脱ぎ捨てられた蛇の殻にも如かなかったから。
あるいは、その事実があなたをむしろ嫉妬させるかもしれない。
なぜならいまでも、思うに、私の肉体にも溺れているから。
遠く離れた不在の肉体にさえも。
わたしたちは一日中部屋のなかにゐて、そして雨の音を聞いた。
軈てノックの音がした。
いつもより遅かった。
その事実は、その音のいつにない微弱音が耳にふれた時に思い出された。
時に、既に、私は彼女が...タオが、いまだれよりも傷ついていることを思い出した。正確に言えば、思い出すに同じく、はじめて気づいた。
わたしがドアを開けようと身を起こす前に窓辺に蘭の横顔を見ていた無言の玖珠本が身を翻して、そしてドアを開けた。
タオが其の時に一瞬の上目に驚愕の色を浮かべたのには気づいた。
見えもしなかった。
見得ているよりもあざやかに私は知った。
——気になる事があるんだ。
そう玖珠本は云ったのだった。
わたしの耳元に。
沈黙の、しかも眼差しの中の不在の一瞬に、穂埜果は顯らかにわたしにそういったのだった。
玖珠本は手首をつかんだ無抵抗のタオを投げつけるように室内に入れた。
タオはうつむき、そして彼女が歯噛みしたのが聞こえた。傍らに立って穂埜果がささやく。
——なに？
穂埜果はひたすらにやさしく、あまりにやさしすぎて耳にさえふれないほどにもやさしく、そして云った。
——どうした？
逃げ出そうとした一瞬があった。
タオに。
穂埜果が抱きとめる前にタオは須臾のけぞって、その刹那目が剝かれたのを見た。
髪が空中に、雨の日のやわらかな冷たい光の中に踊った。
久の字に身を曲げて、立ったままタオはその場に吐いた。
透明な液体、そして胃液を。
手に口を掩うそぶりさえせずに。

振り向き見た蘭は表情をだに変えずに見ていた。
きちがいだよ、よ。
蘭が口の中でささやいたのが聞こえた。
頭の中に。
素手で。
タオは一度身を痙攣させ、倒れるように壁に背を打ち付けた。
彼女の周圍でだけ重力は水平にかかっていた。
私は笑んだ。
一切の邪気も無く。軽蔑も慈愛も含まずに。
タオの爲だけに。
軈て、タオはこのように語った。
だから、わたしたちはこのように聞いた。
タオはその時に 21 歳だった。
日本に留学して半年程度、アルバイトで派遣会社に登録した。
兵庫の車等のパーツ製造の工場に勤務した。
工場の人はみんなやさしかった。
そのころベトナム人は少なかったみんなやさしかった。
タオはそういった。
勤務して二週間目くらいに、工場が生産ラインをすべて一度停止するという事件があった。
結果的にはたった一日の全休止にすぎない。
製造設備の不具合があって、リコールがかかったと、と。
だからパーツ製造も一時休止すると。
連絡網に手落ちがあったに違いなかった。
タオの耳にその日休業する知らせは入らなかった。
タオは遅番の夜の 7 時前に出勤した。
人氣もなく昏い工場に怯え、あやしみながらそれでも事務室のガラスに照明がともっているのを見た。
不意に背後に呼び止められた。
三十過ぎの、若く、背の高い管理者だった。
主任、と彼は工場でよばれた。日本人だった。
主任は云った。今日は休みだ、と。
どうしたの？ なんできたの？
知らなかった、と云っても主任は信じてくれなかった、といった。
その経緯のこまかな部分はわからない。
いずれにせよ主任はもう一人いた同僚を呼んだ。
管理人室に連れていかれた。
ふたりだけ残っていて、明日の作業日程を打ち合わせていたようだった。
自分を眼の前に、聞き取れない日本語で彼等は時に笑いかけ合いながら話し込んだ。

立った侭タオはそれを見ていた。
それなりの、二十分程度の時間がたった。
主任の呼んだその同僚のほうがタオに近づいて、そして体にさわった。
主任を見た。
彼は同僚に笑いかけていた。
同僚の手附きは次第にぶしつけさを増した。
軈て抱きしめられて、体の匂いを嗅がれた。
笑い聲が響いた。
そしてもはや理解できなくなった外国語と。
後ろ向きにされ、そして同僚のそれが侵入するの感じた。
恐怖は感じなかった。
嫌悪感も。
頭の中に白い光がさす感覚だけがあった。
不快さえ感じず、いたみさえ感じない自分を寧ろ恐れた。
次に主任に服を脱ぐように云われた。
恥ずかしい、と。
タオは媚びた笑みを浮かべながら自分の口が受け答えするのを聞いた。
ややあって、笑い声の中に素肌をさらすと、壁に手をつかされてタオは受け入れた。
終わると、早く帰れと主任が云った。
明日遅刻しないようにも諫められた。
タオは服の一部と肌の体液の汚れを気にしながらも服を着て外に出た。
工場を出て廣いだけの大通りをしばらくあるき、角を曲がったところのバス停に出た。
バスを待った。
工場の周囲に、徒歩十分圏内、それ以外に殆ど建物施設はないので、バスはすいていた。
中には二組しかいなかった。
駅が近くなって、閑散としたなかにも町が現れる。
駅に降りる。
時間が十時前だったので人は殆どいない。
電車の中に入った。
車両に疎らに十人ばかりひとが座っていた。
他人がいる、と、はじめてタオは認識した。
人が生きていた。
その時にはじめて、忘れていたことを思い出す様に、タオは自分が強姦されたことに気付いた。
悔しさは感じなかった。怒りも。
ただ、悲しかった。
なにが悲しいのかまでは判らなかった。
死んでしまおうかと思った。
たとえば「日本人がよくするように」電車に飛び込んだ時のその引きちぎられる痛みがタオを恐怖させた。

あまりにも孤独だった。
家族も友人もなかった。
だからタオは死ななかった。
部屋の代えて、シェアする友人と笑った。
本当に楽しくて笑った。
同時に、相談するべきだと思った。
相談するにしても、何を相談するべきか判らなかった。
自分は傷ついている筈だった。その根拠さえなく感じられた。
いずれにしても友人に嘘をつく自分を鮮明に厭うた。
次の日には普通、出勤しないものだと思った。
タオは定時に出勤した。
理由は判らない。
かならずしも、意思はなかった。
主任にあいさつした時、主任たちが自分をそういう女だと思うにちがいないことがたまらず恥ずかしかった。
そういう女と思われた自分を、タオはそこにいる他人のように、あざやかに、嫌悪した。
主任はいつもに変わらなかった。
すでに忘れられたのだと思った。
工場には派遣先が返られるまでの三週間、変わらず勤務した。
数年後、ベトナムに返って数週間立った時、朝、夢を見た。
海辺。
波の音だけ響き、砂浜の貝殻を至近距離に見つめていた。
誰も聲をたてなかった。
だから自分一人しかいあないのかも知れなかった。
表も裏も真っ白いその貝殻の上に、動く影があった。
同じように真っ白い小さな蟻の一匹だった。
思った。
これほど広大な砂浜に、もろい沙地に、巣を堀り維持する蟻のすさまじい孤独を思った。
目が覚めた。
開いたフェイスブックで何年か前にアップした記事が思い出の記事として自分のタイムラインに引き上げられていた。
工場の最後の日に外国人労働者の友達と撮った写真だった。
その中に主任もいた。
写真を撮る時、ミャンマー国籍の同僚が、彼を呼びつけたのだった。
曰く、タオさん、さいごです。しゃしん、とります。さいごですから、しゅにんも、しゃしんとります。
...再アップしますか？
記事の中の自分を見た時に、堪えられない吐き気が襲った。
ベッドにのけぞりだして床に吐いた。
床に飛び散る吐瀉物が更にタオを嘔吐させた。

治まったとき、泣きながらタオは床を拭いた。
胃と喉の掻くに似た違和感が落ち着いた後、タオは再アップした。
日本にいたころ。なつかしい。わかい。
それが彼女が新たにつけたキャプションだった。
そうタオは壁に横たわって、わたしたちに語った。

文書 10

# 文書 10

文書 10（圓位文書Ｃ）
（圓位から久村へ、cc. 香香美）
2019.09.13. メール
（本文）
　最後に報告したのはいつでしたか、あれは６日の日でしたか。
　あれからのこちらでの出来事を念の爲せめて報告しておこうと思う愚僧の心細さ。
　取り立てて何が起こったとうわけではない。起り過ぎたともいえる。
　とまれ、さまざまな漣は四方にたっていひとり思う惑う次第。
　ご一読のほど。

（ファイル）
以下、法要等の雑事...いや、本業で御座いますが、此処では雑事、ということになりましょう。それらは今排除。
眉村家にまつわる事のみ書き出しておきます。

2019.09.05.
朝、先に報告した眉村深雪の早朝の訪問あり。
午前、先に報告した山羽香奈枝の訪問あり。
夜、嚴島神社の佐伯氏宅を詣づ。是は佐伯の婆様のほうから連絡あり会いたいとのことだった故。
午後７時過ぎ。聞けば婆様すでにお休みになられたと。
さほどの高齢でもなく又いかなる高齢でも７時の就眠は如何に？
故恠みひょっとして体調不良かと問う。答えは否。最近次第しだいに寝るのが速くなる。
来年あたりは鶏の鳴く前に寝付くんじゃないかと佐伯当主の母上、笑う。
佐伯の母様曰く、要件は私も通じているから問題ないと。あがりなさいな。
故、客間に。
騰毗は不在。すくなくとも姿を見せず。
島の事についてなにやかにやとたわいもないこと話し坐を暖めたのおちに母上曰く、髙長という岡山の男がせんだって島に来たと。
「髙長？
「ご存じでないか？

「知らない。
「岡山の茨の額田比呂子の今の旦那様。
と、聞けば愚僧眉村和哉氏に聞いた話を思い出す。
問う「その方いらして如何がしたか？
「東京から来た平家の先生、あれが嗅ぎまわってうるさい。なんとかもう嗅ぎまわらないように云ってくれと謂う。
「すでに東京に歸えられておられるだろう。
「そのはず。又、事実はしかに違いなくとも、髙長氏曰くいまだ茨にいて嗅ぎ待っていると。
「なんでそんなことを言いだすのか？
「聞くに比呂子曰く、朝から晩までここやそこやどこやであの先生が様子を窺っている、と。
「気のせいではないか。
「最初はそう思ったが事実らしい、ここ二三日自分もその気配を感じる、と、かくに云う。
「とはいえ、嗅ぎまわった所であの先生に何の得もなかろうもの。
「しかだれも思うけれどもご本人かたく信じておられる。故、あなたの方から先生に言っておいてくれ。
「とはいえ、追い掛け回していないものに追い掛け回すなと謂えというのか。
「そこはあなたが上手に。
「上手に言えと謂われてもそもそもなにをなんと言えというのか。
「そこはあなたの機転のきかせどころ。
「そもそもあなたの縁で島に來られたのではなかったか。あなたが責任もって傳えるべきではないか。
「そこは坊主の話し上手。あなたのほうが適任だろう。
かくて話にならず話の落としどころも無くこの日は辭す。
この夜明け深雪さん訪問あるかと待つ。
なし。是は既に報告済み。

2019.09.06.
この夜明けにも深雪さん訪問あるかと待てど、訪れず。又特にその噂も耳にせず姿も見かけず。
2019.09.07.
夕方（５時くらいか）檀家に寄った帰りに四国側の海邊に佐伯騰毗がひとり散策するのを見かける。
故聲を掛ける。こっち側に見かけるのは珍しいじゃないか（神社は反対側なので）。
答えて曰く、せっかく晴れたのでこっちに来てみた。（その日は日中曇りだったのが此の頃ようやく雲が切れ始めたのである。）
こちらも時間があったので、なにというでもなく海辺を散策。游んでやる、というか。
とりとめのない会話の中に曰く「最近うちの女どもが色々と煩わせているようだが。
愚僧「お婆様はどうした？ 先日伺ったら出てこられなかったが。

騰毗「うちの女どもは迷惑をかけて居ないか。
愚僧「母上の處に茨の高長さんという方が見えたか。
騰毗「２日じゃないか。慥か月曜日の夜に来て、すぐに帰った。
愚僧「あなたもあったか。
騰毗「抑々私に逢いに来た。初対面だったが、おそらく眉村にでも聞いたのではないか。顔を合わすなり真っ赤になって憤慨して代わりの者を出せと言った。だから母の方が対応した。
愚僧「高長はどんな様子だったか。
騰毗「お前に用がないというならわたしの方で彼に用がある譯もなく面倒なのですぐに部屋に戻った。ふたりの話の詳細は知らない。又興味もない。
一見したところ焦燥しているように見える。奥さんの方になにか問題があるのではないか。
愚僧「ただ、２日の日に来たのなら話に若干の食い違いある。久村氏が東京に帰ってから昨日に今日で茲に来たことになる。
騰毗「私にはわからない。
愚僧「あなたはわたしに佐伯の女性たちが迷惑をかけていると謂った。どうしてそう思うか。
騰毗「あなたが起こって帰って行ったと聞いた。
愚僧「それだけか。
騰毗「それだけ。
愚僧「あなたのほうは大丈夫か？ あなたも煩わしく思っているからそう思ったのではないか？
騰毗「わたしの方は馴れている。ただいつも言うように家など出て仕舞いたい時がある。このごろ非常に多い。
愚僧「立場としてそんなことはできないだろう。
騰毗「あなただって家も故郷も捨てたんだろう？ それでこんなところに来たのではないか？
この夜明けにも深雪さん訪問あるかと待てど、訪れず。又特にその噂も耳にせず姿も見かけず。

2019.09.08.
朝。時間にして７時前。庭に花の手入れをするに眉村和哉氏來たる。消耗の色甚し。
愚僧「如何なされました？ こんなはやくに
和哉「それがちょっと...
謂いがてにするので茶室に通したのである。
謂いがてついでに茶室の中で茶を入れる。
和哉氏恐縮し作法もしらないので...
愚僧云、進める方も勝手次第、から、飲む方もどうぞ買って次第に。
愚僧法衣の爲胡坐するわけにもいかず、故、和哉のみ胡坐させ其の上柱に背もたれなどさせ自由にさせて、そうして話し話しするうちに漸くに話し始める。

曰く
「住職。実は相談があって。
「から、きたんでしょう。存じてますよ。どうぞ。
「離婚した方がいいかなと。
「離婚？...誰と。
「もちろん、妻と。
「誰が？
「私が。
「なんで？
「実は、...まえまえから思ってたんですが、妻、怪しいんですよ。
「何が？
「深雪が妊娠してるの知ってますか？
「存じてます。お母さまから。...大変およろこびで。
「母とも時々相談するんですけど、
「お母さまとも？
「あれ、俺の子じゃないよと。
「なんで？
「眞夜羽も。
「なんでそう思うの。
「こんなふうになったからそう思うんじゃないんです。前から...
「前から？ 抑こんなふうにとはどんな風に？
「自分の子、すくなくとも取り敢えずはそう思おうとしてた子があんなふうに、怪物みたいになって、
「それでも、それは古藤園の山羽さんが、
「あれ、住職は納得します？
「あなたは？ してないの？
「あれはこじつけ。部外者のこじつけでしょう？
「筋は通ってるじゃない？
「こじつけっていつでも筋は通ってる。
「じゃ、間違いだと。
「間違ってなかっとして、僕ら、どうなります？ なんにも、解決できてない。
「眞夜羽くんは相変わらず。
「日に日に變になってく。
「今日も？ 朝、...
「昨日も一昨日も、たぶん明日もそうでしょう？...本当に、ただ、消耗する。
「あなたがしっかりしなきゃいけないんですよ。
「本当に父親ならね。けど、あの子含めて、腹の子含めて、あれは、違う。
「じゃ、誰の子？
「だんだん、妊婦の体になってくでしょう。それとなく。特に夏場薄着だから、それに、
「なに？

「あのつわり。あれ、聞くと、
「お吐きになる？...立派じゃないの。これから命をお生みになるお母さんの、
「無理。あの音。えづく、...
「あなたもそうやって生んでもらったんでしょう？
「日に日に見ず知らずの誰かの嘘がでっかくなってく
「だから心当たりはあるの？
「人の？
「誰の子？
「住職、実は知ってる？
「何で？
「住職、いろいろなひとの話聞くから。...僕には誰も云わないでしょう？ たとえあいつの、そういう現場見てたとしても...なに？ 憚って？
「私は知らない。
「知ってても言えないでしょう？ 僕には。
「それは被害妄想よ。
「島の人間実は知ってるんじゃない？ 誰と出来てるのか。
「まさか。
「眞夜羽なんか、顔からして、
「面影は在るよ。
「母親には似てる。...男の子はだいたい母親に似るって言いますけどね、...ま、そうなんでしょう。残りは、
「面影はある。
「そんなものどうとでもいえる。面影なんて何となくの者でしょう？ 雲の形だって木の幹の模様だって顔みたいといえば顔みたいああ誰それの顔だね、そうだね面影あるね、そっくりだね、
「証拠もないのにそんなこと謂わない。
「第一、深雪だって時間ならいくらでも作れる。八方美人だから。奥さん付き合いあるから。店なんか実際母親ひとりで何とかなるしね。俺もいるし。時々抜ける。奥さん連中のお茶会だとかね。廿日市まで行ったりね。お土産はケーキ。誰と行ったってそんなもの買って帰れるでしょう？
「そんなもの疑いだしたらきりがないよ。
「あれは他人の子ですよ。
「それは妄想よ。あなた、このままそんな妄想ばっかり弄んでたら、そのうち本当に心まで駄目になるよ。病むよ。壊われるよ。ぜんぶ壊してしまうよ。
云々。
だましだまし諫め諫め励まし励まししかれども和哉氏生返事に心ここにあらざるは隠しようもなし。
此の時に聞いたのですが、和哉氏と深雪さん、高校時代の先輩後輩だった由。深雪さんは二年下。広島の福山市に或る盈進高校という学校ですが。はからずも今不意に縁づいた茨の鄰り町の学校。

ここで逢ったものを、高校時代には顔見知り程度、後お互い二十歳越えた頃合いに島で再開されてそれで交際はじめられたとのこと。
深雪さんのご実家もその福山市。
深雪さん岡山の就実大学の経済学部に通われていた三年の夏休みに嚴島で巫女のアルバイトの募集を紹介されて渡ったのがそもそのもの縁。
そのあたり、交際時代の話でもして和らげようとするのは愚僧の愚案。思いだせば思い出すほど寧ろ針の筵か。
焦慮の翳り濃い儘話疲れるようにして和哉氏辭するを門まで見送ろうとするに、愚僧寺の庭背後に雀の鳴く聲を聞く。
庭は静かに冴える。
見上げるともなくに空は久しぶりの晴天に澄み渡る。
おおかた９時過ぎ、いまだ朝の光は斜めに影を鮮明にしかすがに淡く。
愚僧、ふと謂う。
「深雪さんも同じように苦しんでられる。
「何を？
「同じように、
「住職何を御存じなの？
「深雪さん、同じく妄想に取りつかれている。曰く、眞夜羽はあなたのお父様の、...眞砂さんの種だと。
「まさか。
「本人そういう、ただし、これは山羽が眞夜羽と話したのを聞いたのち。あのとき、あのこそんなことを口走ったでしょう？ つまり、彼女の惑い迷う気持ちがその詞...みなさん、誰が何と言おうと彼が本当になにかの生まれ変わり、山羽の客観的な言い分はすべて虚妄、そうむしろ信じていられるから。違う？...から、みなさん神秘的な言、黄泉の言、あるいは神託の一つでも聞くように實の心に實には聞いておられるからね、から、そう妄想されたんでしょう。
...だから、そうおっしゃった。あの後の明けの早朝、いらっしゃって。ここに。今もうなにも隠さずいいますが。そうおっしゃった。あれは眞砂の父の子、と。けれどもこういう、腹の中のは彼のの、あなたの子である、と。
おわかりになる？ わからない？
あなた、まさか眞砂さんがそんなことしたとお思い？
「まさか。
「なら、それは妄想。眞夜羽くんの言葉に飲み込まれた妄想。そんななかにも腹にはあなたなの子がという。...ことは、即ちそれはあなたの実子、と。...いうことは誰もあなた以外には居なかった。あなたはあなたの妄想に嫉妬しただ無垢の女を疑い石打たんとす、と。
...いう、ことにならない？
違う？
云って和哉を見たらば明らかに和哉氏の目に忿怒の色。
愚僧思惑の外れたのを知る。

「親父の？
と和哉氏。
「妄想よ。云ったでしょう？
「親父の？
思わずに目をそらし、再び見るに和哉氏、むしろつきものも落ちた顔色。
曰く
「ありがとうございます。...住職のおっしゃること、わかります。...ぼくが、しっかりしないと。
笑って、そして和哉氏は辭す。
車の中の人となる。
夙夜深雪さんの訪問なし。

2019.09.09.
騰毗のことがなにとなく気に懸かって、又その母に詰められた茨の髙長氏のことも含め、一度顔を見せに行こうかと山途を下りる。是は夕方の五時過ぎ。
一度下まで降りて神社の後ろをよこぎりかけるに背後に女の聲、住職、と。
見れば深雪さんであって、曰くいい天気ですね、と。
「よかったですね、ここのところぐずぐずで。お出かけ？
朗らかで翳りも無くいつかの夙夜の匂いだにもなし。
あやしみ、且つはそれでも安堵する。
「佐伯のところまで。奥さん、その後どう？
「なんとか。
「眞夜羽ちゃんは？
「相変わらず。
「そう。...大変だけれども、
「でも、もう大丈夫ですよ。
云々。
あくまで始終明るく。
故、あいさつ程度に分れる。
佐伯宅、ふたたび母が出てくる。
騰毗は不在。
騰毗母に問「ところで、髙長さんはどうなったの？
「髙長？ 茨の？
「そう。
「なにも云ってこないんだから。放って置きなさいな。
そう云って騰毗母、この日は笑った。
夙夜深雪さんの訪問なし。

2019.09.10.
午前十時過ぎ。

檀家からの帰りに下で、神社と埠の間くらいに佐伯の婆様を見かけた。
向こうからこっちにゆっくりと歩いて來られる。
うつむき加減でなにか考え事か。
こっちの端とあっちの端と、それなりに離れたところを通られたので聲を掛けずにすぎる。
その夜も更け、軈ての夙夜、衾の向こう、縁に人の気配あり。それとなく起きてそっと開く。誰も見当たらず。
たしかに気配はあった。
此の日眉村氏等の噂聞かず。

2019.09.11.
午前中寺に来客あり。
加賀文昭さん。御年 65。寺の裏に植えた韮をすこし戴けないかと。
故、いいですよ、お好きなだけ、と。
此の時に聞く。
眉村夫婦、最近口論絶えず、と。
加賀氏宅、眉村宅とは直線数百メートルも離れあるか。
この前なんか店の中でやっておったと。
なにを以て言い争うや聞けば、とにかく箸のもちかたも気に喰わないんじゃないか、と。
是が 9 時前か。
昼前、佐伯の母より電話あり。
会えないかと。
髙長の件か、と。
違うという。
昼は所用あり。故、四時過ぎには伺うと。
佐伯宅に行くに山を下りるに眉村夫妻、並んで犬を散歩する。
目が合うと屈託なく笑う。
加賀氏の話と思い合わせて、一体どちらを恠しむべきか迷う。
佐伯宅にて。
佐伯の母上が應對。玄関口出て來るなりに挨拶も無くこっちに來いと。後を追い客間に。
焦りの色濃し。
曰く、騰毗の行方が知れずと。
「いつから？
「昨日から。
「昨日？
「夕方、歸ってこないものだから。...いま、私だけだし、一應九時にもなれば外に捜しに行ったけれども。
「お婆さまは？
「あの人は...（と口を濁し）倉田の先生に連絡しても夕方に普通に歸ったというし。
「警察には？

「ことが事だからなかなか言えることじゃないでしょう？ 宮島で神社の当主が家出しましたと？...まさか。
「お婆様に言って、あのひとも友達ならいくらでもいるんだから、
「頭おかしくなったのよ（と、爰で終に母上叫くのだった）。
「頭おかしく？
「（須臾默止し、息を附き、聲ひそめ早くに謂いけらく）アルツハイマー？...なに？ あれは...
「だったら、...
「パーキンソン病？...知らないわよ。まだ病院にも連れて行ってない...
「外聞なんてこの際、
「そういうもの？...そうものじゃないでしょうよ。なったらなったで、...若すぎるけれども、...要するにぼけ。老人呆け。...まだそんな、でも。...ま、そう。病院くらい連れて行かないと、...それはそう。明日行くわよ。どこ？ 廿日市にある？ 祇樹園はいやよ。あそこはつまり廢人園でしょう？
「その言い方は、
「圓位さん身内がいないからよ。から、そう謂うのよ。から、そういう客観的な？...けれども、...わたしの身になってみてごらんなさいな、もう、こんな時に、どっちもどっちで、
「お婆様そんなに悪いの？
「早い。進行が。...あんなもの？...昨日解ってたものも今日は判らない。一昨日わかってたことなんかもっとわからなく、...あんなもの？
「個人差が、...お会いしても無い。
「会って刺激しないでよ。昨日も今日も、...昨日はひょっとして騰毗のことさわいでるの聞いたんじゃない？ わたしが、電話で倉田に...口裏合わせないといけないしね、あの人、...本当に無能。内密にねって。云ったら、それでも事が事だからと。いやことが事だから内密にしなきゃならないんでしょう？ 頭が悪い。...それで、あの人、お母さん、呆けた耳に聞いて捜しに言ったんじゃない？ 逆にわたしがあの人探し回る破目よ。...本当に、すぐ行方不明...なにもわからないもんだから。勝手に出ていくなってったら何て言った？ ね、あの人、そいでも足ありゃ歩けるからなと、本当に要領得なくて、
「順番に片付けよう。まず、お婆さん、彼女、明日古藤園でいいから連れて行ってみなさいよ。
「いやよ。あそこは他に行き場所なくて行くとこ...覚えてるでしょう？ むかし。あそこで自分の眼くりぬいたなんて女がいた。
「それはそれよ。だったらそこの先生のだれか来させればいい...
「考えとく。
「自分ひとりじゃ手もたりないでしょう。
「だから圓位さんに連絡したんじゃない？
「わたしも老いぼれだから、なかなか役にたたないよ？
「騰毗は？
「彼は...

「うちの騰毗はどうするの？...どうすればいい？...どうしよう...あの子...ね。
「なに？
「なんて思う？
「なんて？
「なんで家なんか捨てたんだろう？
と、いい終わって須臾の沈黙の後におもむろに佐伯の母上泣き始める始末。
愚僧慰め言のひとつふたつ謂わんとするにかの女曰く
「わたしの何がいけないんだろう？...わたしのせい？ わたししかいないよね？...ね、どう思う？
此の日はさしあたり自分も手を盡して探すから今日は一日家にいて待っていろと。そのうちひょっこり帰ってくるかもしれんと。
くれぐれも變な考えは起こすなと諌め辭す。その足で片山定夫の家に行き（おそらくはもっとも口の堅い男である。）その子息あわせて島をさがして回りもするが濃いのは月の影ばかり。騰毗の影だにささず。
片山云、島にはもういないで、と。こりゃ島から出たんじゃないか？
それは愚僧も此の時すでに思っていたこと。
佐伯宅尋ねて聞く、歸ってきたか。
答え否、故母上に一言す。今日は見つからなかった、と。あしたも探してみよう、と。
したらば曰く、「やっぱり？...あの子、島から出てったの？
愚僧それにはかくともしかとも答えず。
辭す。
夙夜深雪も騰毗も寺には來ず。

2019.09.12.
早朝、７時前佐伯の家に聲を掛けるが誰も出ず。未だ兩人とも眠るか。それならそれでよし。
昨日の片山定夫と子息二人と神社の前で待ち合わせて捜索。郁夫は60過ぎ、子息はその半分とすこし。子息二人は山に上がり我々は別れて下を探した。
二時間程度。
後所用の爲片山に託す。天気は曇りながらも雨の氣はなし。佐伯の母上が話のとおりなら失踪三日目。
案じられてならぬ。
九時には子息は仕事に戻る。故、片山曰く友人にも聲かけて探させるがいいか。
愚僧答えて、佐伯の母様内密にと、それはともなく母上のその心情考慮の上ご協力願う、と。
片山云、もちろんの事、と。第一我々にとってあそこに醜聞などあってはならぬことである。
愚僧、然、と。
思えばこの事実も又騰毗にとっては心的負担多大なるか？
片山君と別れ、埠の前を通り過ぎようとするに閑散の広場、朝の傾斜す日差しの向こう

に走り來る女の影あり。
叫び聲等なし。ただし頭の奥に鳴る。何故なら四肢の骨格すべて外れて出鱈目にのたうつにして走る。誰に向かうともどこに向かうともなし。ただただ出鱈目に走りをるのである。
何事かと思うにそれ眉村の深雪さんに他ならず。
後ろに人影、追いかける。それは和哉。
見る覩るうち追いつき押し倒すが如後ろから覆いかぶさり深雪を前のめりに転ばす。
聲はなし。
深雪默止し和哉も默止し荒れた麁い息を肩に。
愚僧、何や、と。
何の起るやと。
周囲の人の疎らも正気づかずて見まもる。
歩く愚僧そのままに彼等の附近に近づいたが幸い、...何を、しておられるん？
実際に夢から覚めない心持だったのである。
和哉うつぶせの深雪に乗り地に押し付けた儘「こいつ、...本当にこいつ、本当に、こいつ...
愚僧話しかけてようやくに我に歸る。我に返れば我を忘れ、彼等の前に膝附き怒鳴るようにも和哉を諌めて曰く「のきなさい。この女のひと、...あんたの恋女房だろうよ。...なにを、...どきななさい。
「あんたもこいつの肩持つんですか？
「肩もなにも、あんた殺す気か？ あんたの女房殺す気か？
「お前もこいつの男か？ 違うんか？
和哉血相変え猛り狂う猛獣に同じ。故、失礼ながら愚僧和哉の頬を張った。
「莫迦も休み休み言え。
謂い、和哉とにらみ合うに和哉ようやくに正気付き（乃至、諦めたように）深雪の上から身をずらし地に座り込んで天を仰いだ。
此の時、深雪初めて悲鳴らしい聲を地に顔をなすりながら上げたのである。
周囲のひとだかりできかけるのを倦んで愚僧夫婦を店にまで連れて行く。シャッターおろさせ店休とさす。これだけに三十分ばかりかかる。愚僧又眉村の知り合いかわりばんこに顔を見せたがここはそっとしておいてやって、と、愚僧斷る。
店につれこみシャッター下ろした時に、突き当りの事務の間のみ照明つけられず昏がる。そこに一重さんがひとり座っておられたのに気づく。そこは窓もない物置のような空間であって、座敷に座って斜めにデスクトップパソコンの画面の光にのみてらされておられる。
近づき、声をかけて曰く「どうされたの？
一重さんむしろ懐舊の念に憑かれた人のような、そんなやさしげな目に愚僧を見る許り。かくておだやかに言、朝からご迷惑おかけして。
愚僧「どうされましたの？
一重「朝から、さっきそこで、言い合いになって...もう、
愚僧「ご心配でしたでしょう、

一重「若い子ら、年よりの謂うことなんかもう、なんにも聞かんからね、...
と。
此の時に和哉氏店内の店舗床に胡坐し深雪さんはその離れた壁際の椅子に座り込み壁に背もたれす。
爾愚僧彼等に以下の如問うたのである。
愚僧（和哉に）「落ち着いた？
和哉答えず。
愚僧「一体、どうしたの？
和哉答えず。
愚僧「なにがどうなったの？ どうしてこんな事になったの？
和哉答えず。
愚僧「さっきはあんないい方したけどな、わたし、あんた達を助けたいのよ。それはわかる？
和哉答えず。
愚僧「話せる？
和哉ようやくに答えけらく、黙ってくれませんか？...と。
愚僧聞く。和哉を視る。和哉已に落ち着き已に何をいきりたつともなく嘘のように靜まりをる。故、愚僧話してきかせてみて、とでも、そうとでも言おうと謂いかけるに和哉云いけらく「ぼくら、もう、死んだ方がいい。
愚僧「何を謂ってる？
和哉「もう、なにをやっても手遅れですよ。最初の比には戻れない、戻せない、全部、そもそも
愚僧「あなたがそういう、
和哉「さいしょから全部間違ってたから。
愚僧「何を云うの？
和哉「違います？
愚僧「今日一体何があったの？ 昨日は、こんな、こういう感じじゃなかったでしょうが？
和哉「昨日？
愚僧「ご近所...ばかりじゃなくてな、離れた處の誰さん彼さんみんな、それとなく心配してられる。...和哉くんね、ひょっとして、毎日こんなことしてるの？
和哉「毎日？...いつ？
愚僧「いつか、毎日...心配して、...あんたを、あなたたちをね、我が事、我が息子夫婦の事みたいにな、心配してくだされてる方おられて、その人がせんだってに寺にこられて、それであの子らなんとしてやってくれろや、毎日あの子等（と、爰で奥に一重さん聲あげて泣き崩れたのだった）
和哉「嘘。...それは
愚僧「嘘じゃない。人のやさしさもあんた、
和哉「嘘ですよ、ただの、...
愚僧「わからなくなったの？
和哉「讒言。...誹謗中傷。...でたらめ。...いいがかり。

愚僧「じゃ、今日の始末はなによ？
和哉（このときなにか言いかけ、そして云い淀み、不意に笑んだに近い顔に云った）「そっちの方信じてるんだ？
愚僧「なに？
和哉「住職、そっちの奴ら方信じてるんだ。
和哉聲を立てて笑う。
愚僧「今日の始末は一体何？
和哉「あいつがひとりで暴れ始めたんですよ。
愚僧「暴れた？
和哉「...見ればわかるでしょ？...まだ客の來る時間じゃないからよかったけど、
愚僧「でもさっきあんた、その客の前でやっておったけどな
和哉「８時すぎ？...わすれたけど、
愚僧「それで？
和哉「そこらここらのもの手当たり次第投げる蹴飛ばす叩きつける...片付けた？
と、和哉氏奥の母上を返り見る。
一重さん顔手のひらに埋め肩ふるわせ啜り泣く。
愚僧、鼻に涙の温度だに感じられ心痛く、此の時に店内に荒れた様子なくいつもどおりに整理されてあり。
和哉「母が、掃除してくれたんですね。
愚僧「なんで？
和哉「知らない...だって、たぶん。荒れ放題だと客も入れられない...から、
愚僧「じゃなくて。なんで深雪さん暴れたの？
和哉「知らないですよ。おかしくなったんじゃないですか？ 信用できない...いきなり。咬みつかれるかと思った。振り向きざまですよ。髪ひっつかまれて。般若の鬼の面でも化けたみたいな、
深雪「あんたが云ったからじゃない？
和哉「默れよ。
深雪「あんたが、
和哉「いきなり、人の店ぎちゃぐちゃにしやがって
深雪「殺そうかって、知ってます？（と顔を上げ愚僧に）
和哉「出て行けよ。もう、
深雪「わたしのお腹撫でて、で、な、
和哉「お前のせいで全部ぐちゃぐちゃ。
深雪「今、なぐってやろうか？ 腹、
和哉「全部壊れた。
深雪「なぐってっやるよ、な、
和哉「全部だいなし
深雪「始末して遣るよ。
愚僧「そんなこと言ったの。
深雪「言いましたよ。耳元。後ろから抱きつく見たい。いきなりきて。...気落ち悪い。

ほんと、...なにあれ？...なに？...ほんと、気持ち悪い...で、にたぁって笑って、...口くさいし、...な、な、な、って。云うの。...本当にもう無理。気持ち悪い、暑苦しい、息くさいの！ 殴ってやるよ、な、な、な、臭い！ いま、始末して遣る、腹、始末して遣るよ、な、な、って口臭い！
和哉「殺すぞお前、
深雪「言った！ 聞きました？ 謂った！ ほら云った！
愚僧だまりなさいと一喝、しばらく默止し思案して曰く「祇樹園から、人、呼ぶわ。
深雪「まだあんなじゃない...あんな、廢人じゃない。あんな、地獄の底の人みたいに堕ちてない...
愚僧「助けてもらう、あそこの人、
和哉「また？
愚僧「放っておけないから。取り敢えずはだれか、話聞いてもらう人がひつようよ。...だってそうでしょ？ あんなたたち、今わたしがじゃ、二人で、...三人で、話って、頑張ってね、て、出て云って、それ、いやでしょう？
だれかに話聞いてもらうワン・クッションほしいんじゃないん？ 息つぎ必要よ。だから、...島でいろいろあそこの悪口いってるのは知ってるけれども、それだったらそれだったで、あそこの人ら介護相談ケアのプロということ、違う？ 深雪さん曰く地獄の底の人のお手伝いお助け、毎日してられるんだから、どれだけ手馴れていよう、あんたたちの問題なんか朝飯前よ、...な？ 違う？
ちょっと、電話するわ...
と、愚僧祇樹古藤記念園に手すきの者をまわす様に連絡したのである。
園長曰くそれは大変と、但し、今毎朝の大混乱の一大事たる朝食の最後のところでたぶん手すきの者の手も埋まっておろう由、たぶん三十分以内には行かせられるがそれでいいか？
故、宜し、と。
故、愚僧そのままにうずくまる和哉氏といつかスマートホンを弄り始める深雪を目に入れながらに奥の事務の間に腰を下ろす。
泣き已み時に鼻すする一重さんと語る。
愚僧云、ご心配でしょうと。
于時一重さん曰くこんな年にもなってまだこんな目を見る、と。
痛ましく愚僧しばし默止し軈て一重さん息子らの耳を憚りながら小声で、しかれどももとより和哉氏心ここにあらずひとり懊悩するらし深雪さんスマートホンに誰そやとメッセージ送り合うにいそがしいらしそれら悉くなにというでもなく愚僧の眼に痛くて耳は聞く
「毎日なにごともなく、今日は何事もなく、と、まあそう祈るような気持ちでおっても、それでも、それはそれで、今日の日にこうなって、こうもなってしまったんならいっそなるようになって、それでもそれもそれこそいい機会で、是れを機にでもないんですけれども、うまくなんとか、なるようになって、まわりの人ら、心配心配あげつらい半分、けれども、あの人らあの頃あんなだったけれども、いまはこうなって偉いなと謂うてもらえるようにならないといかんのよと思いながら、自分に謂い言いしながら、それでもね...

「そんなに、毎日、あるの？
「あるよ。...ない。ないけれども。...あるよ。心配よ。ちょっとの事。ほんのちょっとの事でも、...心にささってね。
「痛ましいな...なんで...時に眞夜羽くんは？
「今日木曜日でしょう...金曜？ どっちだっけな、...学校。
「もう行かれた？
「あの、佐伯の当主も行方くらましたらしいね。
「知ってられる？
「門田のおっさんから、...どっちもこっちも、なんとも行かんね。
「息子さんらも、心さえ落ち着けばね、
「夢、見たのよ（...と。
そう不意に一重さんは言い始めたのだった）
「夢？
「おじいやんの。...先代の眞砂の...あれも住職の世話になってね、...あのひと、...
いつもは呼んでもうんともすんとも出てもこないんだけれどもな、今朝がた、ふいにこう、夢に、...
あの人、詫びるの。...家の、台所で大根切ってて。難儀でね。いっつも、そんな大根なんかに難儀する事無い、そんなもの、だけれどもどうしても捌けないのね、それで、奥から眞砂が呼んでね。
いま忙しいから待っといてくれと、謂うにもすぐに來い、こっちも急ぎじゃと謂って、...
行けばあの人、なんにも急ぐことない、畳の間...昔のね、ホットカーペットあの人が買ってきて敷いて仕舞うまえのね、あそこ、...
すまんな、謂うて。
寝っ転がって片肘でね、あんたそれ人に頭下げる態度じゃない、人見られたら笑われなさるよというたら、謂うの。
俺が悪いんよな、と。
あんたが悪いんか。
そうじゃ。
あんた何したん？
そうじゃ、と。なにを云うてもそうじゃ、そうじゃ、そうじゃ、此れを云うてもそうじゃ、あれを謂うても、...
それで、眞砂謂うの、ごめんな、と。
此の人もう、ひっぱたいてやろうかと思って。
それで手を上げたら、...な？
其の時なんじゃない？ 眼、褪めたのは。
もっとなんかあった気もするけど...でも、一緒よ。...たぶんね、...そうじゃ、そうじゃ、と。
たぶんね...
「あなた、何か知っておられるんじゃないの？
「私？

「何か聞いておるの？
「眞夜羽のこと？
愚僧默止す。故一重さん語る、
「あれは眞砂の子供なんでしょ？
「なんで？
「似てるな...顔な。
「そんなことは、
「聞いた。
「誰に？...眞砂さんに？
「ふたりに。
「誰と誰？
「深雪さんと和哉さん
「そんなもの、
「前からよ、...前から知ってたのよ、和哉は何日か前...その前、ずっと前、
「いつのこと？
「眞砂の四十九日過ぎた比じゃない？
「眞砂さんの...
「その頃、真夏でもないのに、深雪さんやつれたように...夏痩せ？ ときどきあるでしょう？ いまあまりないけどね...クーラークーラーとね、寒くて風邪ひく始末な、...やつれて。大した事ない、すこし...そう見えた。
だから、深雪さんに...もうひとりくらい、孫、な？ 眞砂もいなくなったし、その形見じゃないけれども、もう一人くらいな？
ほしいものんだから、もちろん、わたしなんか口だすもんじゃない、けれども、...だいじょうぶ？ と。
心配でね。なんぞかあったら、事だからね、だから、あんた贏せたんじゃないの？ ちょっと、大丈夫なの？
そうしたいきなり真顔になって、...朝よ。こっち来る前に、向こうで、家で、朝ご飯つくっておって、...いきなり。
突然ですよ...くるっと、わたし、向いて、おかあさんごめんなさいと。
其の時、包丁持ってたから。何や、わたし、この娘に刺されるの？ って、そう思うような、...
異様な顔よ。だから、どうしたの？ 一体、どうしたの？ と。
いいのよ、別に刺されるなら刺されて...こんな、それでもそれであの子らの爲になるんなら、草葉の陰で百回二百回死んであげるよ、...
けれども。謂うの。泣きそうな顔してね、秘密にしてました、と。
何をよ。
実は眞夜羽は和哉さんの子供じゃないんですと。
...まあ。
其の時はね、...まあ。詞もなかったけれども、其の時はそれ、朝だし、もうすぐ和哉も起きて來るし、それで、まあ。後で話そうよと。

後、夜にね。その二日後じゃないの？ その時和哉が遅番でひとりで店守ってて、わたしらお言葉にあまえますと謂うて先に帰ってきてね、...暇だったからな。
いまがいい機会なんかなと。それで深雪さんに聞いたの、せんだっての話、あれ、なに？ と。
そうしたらば、今度は、いいえ、違います。なんでもないです、と。
そうならいいけれども、本当はなにかあったの？
何でもないです。
子供は子供だけれども、眞夜羽もいたしな...
それで、眞砂がなにかしたんかと聞いても、今度は何も言わない。違います、心迷い、心が迷うただけですから、と。
それでおしまいよ...そんなことが在ったの。
忘れはしないけれども、覺えてもいないでしょうよ、毎日毎日、...それでも幸せ、毎日波風たつけどそれも幸せ、そう思うが花、そうもこうもしてるうちにこう、...こうなってね、...
あなた、知っておられた？
と、一重さんは顔を上げ、私を見た（それまで彼女は目に和哉を追いながら、ひとり膝の上に指遊びをし続けていたのである）。
「わたし？
「あなた、知ってられた？
「わたしは何も...眞砂さんからは。
「嘘。和哉が云うの。二人で店、閉めてるときにな、あのこ、その日の錢勘定しながら、お母、知ってるか？
なにを？
眞夜羽、あれ、親父の子供らしいぞ、と。
何を云うんならと。
したら、あの子、沙羅院の坊主が終に口割ったで、と。
「わたしはそうは言ってない。
「ごまかさないでもいいのよ。もう、
「わたしは、
「いまさら嫉妬もなにも
「あれは、
「憎しみも何も、
「だからね、
「恩讐の彼方に。いまはもう、なんでもいい。落ち着きたい...
かく一重さん語り語りするうちに古藤園から笠原一二三が若い女性職員を連れて來たれり。
一二三愚僧をいたわり又一重をいたわりし愚僧に言う、ちょっと、お話いい？ と。
彼、事の経緯を聞かんとし故一旦店の外に出て愚僧つぶさに話す。山羽女史の手を煩わして以降の事のあらかたを、である。夙夜の深雪の訪問をも含めて。
一二三聞き終わりて二三質問あり、後に曰く島で今、えらく噂になっているよ、と。

愚僧問う、眉村の件？
答えて曰く、それはそうよ、朝からあんなところで、あんな...血まみれだったの？ 眉村奥さん...
云々。
入ると女性職員、相変わらずに距離置いて座りをる夫婦を目に見続けながらに一重の背をさすり謂い言いして。
時に、佐伯の事もそれ以前に午前の法要もあれば長居するわけにもいかず一二三にだけ辭して歸ろうとするに突然に和哉氏顔を上げ背に下棚の足に後ろ頭ぶつながらに「あああ！」と叫ぶ。
心痛たまりにたまって終に口に出るか。
再び「ああああ！」
此処で愚僧一二三に宜しくと耳打ちし辭せり。
檀家の處に大幅に遅刻していくと、先方事の次第已にご存じで。むしろ腰でももんでさしあげようかと謂い出さんばかりの始末。愚僧恐縮す。
終わり、山道を下り寺に一度帰ろうとするふと季節も違えども思い出したのは若山の牧水、たしかかの人香りならば梅より沈丁花と取る、と。曰く、
　何處に咲いてゐるのか判らない、庭木の日蔭に、または日向の道ばたに、
　ありともない風に流れて匂つて來る沈丁花のかをりはまつたく春のものである。
　相當な強さを持ちながら何處か冷たいところのあるのも氣持がよい。
と。何の故にこんなことを思い出すのか、これから何もかにも枯れ行く季節、ただただ心痛し。
夕方、片山から連絡あり、これはどう考えても佐伯の騰毗は島にはいないよと。
廿日市の警察に出も云ったほうがよくないか。
愚僧答えて、まず母上の意見を聞き、今日一日待って視ようかと思う。いやなに所詮生まれ育ったあったり、ひょっこりだれか知り合いの家にいるのかもしれぬ。そのまま家で休んでくれ、今日は何をせずともよしと。
片山云、唯唯と。
故また佐伯宅に夜７時に詣づ。
相変わらず佐伯の母上ひとり。昨日よりは落ち着いて見ゆ。玄関口に立ち話す。思うに、奥に通すのも忘れているのである。...
かの人いつになく香水を身にまき散らしたようである。異臭とでも呼ぶしかない強烈な香が体中に立つ。
愚僧問いけらく、如何がなさった？ と。
佐伯母答えけらく、こんなものでも浴びとかないと臭くて...
愚僧「臭いって、なんの匂いもしないじゃない？
佐伯「自分よ。自分が臭くって。
愚僧「なにごとも思い詰めちゃだめだよ。こういうときこそ気楽に構えておきなさいな。
佐伯「気持ちの問題じゃない。物理的に臭いのよ。
愚僧「気のせい、気の病よ。
佐伯「本当よ。實はね、もう二日もお風呂に入ってないのよ。

愚僧「風邪？
佐伯「じゃなくて、昨日...じゃない。一昨日、ね。お風呂入ろうと思って、だから、お風呂だから当たり前、脱ごうとするじゃない。脱げないのよ。一枚上のものならいいんだけど、肌についてるもの？...脱げないの。
愚僧「何で？
佐伯「怖いのよ。身ぐるみはぎとられるのが。素っ裸になるのが。もうほんとに...恐くて...だから、ここのところ下着だって変えてない...だから、さ。自分でさ自分の体、本当に臭くて...頭おかしくなってるんじゃいのよ...と、いうか。おかしくなりかけてるから服もぬげないんだけれども。
愚僧「考えすぎない方がいいよ。
佐伯「そう。そうと以外、謂うこと無いわよね。だからわたしも自分に言う、考えすぎるなと。でも、脱げないものは脱げない...
愚僧「騰毗、...ね？
佐伯「いた？
愚僧「いない。
佐伯「でしょ。かえってこないもの。
愚僧「警察に謂ったら？
佐伯「言った。さすがに。くれぐれも内密に、と。したら...
愚僧「なに？
佐伯「あいつら、わたしを尋問するのよ。ここまで来て。部屋の中まで確認して...お婆様まで。
愚僧「仕方ない。仕事だから。それでもそれで手掛かりでもあれば、
佐伯「違う。ただ私を疑ってるだけ。だって、連絡遅れたでしょ。それがあやしいんじゃない？ あんな、あんなに人の心もわからなくて人さがしもあろうもの？
殺して焼いて喰って遣ろうかと思ったけどどうせ犬も喰わないからやめたわよ。
愚僧「それは、ひどいね...でも。
佐伯「警察に謂ったら安心だって？
愚僧「そうじゃない？
佐伯「もう死んでたらどうする？
と言って、あえて斜にかまえて愚僧を見た。その目に子供じみた色又大人の女の媚び共存し、感じさせるのかの人の痛む心のすさんだ様のみ。
愚僧「まさか。
佐伯「警察も、本気ではしらべないと思う。
愚僧「なんで？
佐伯「だってあいつら、騰毗の部屋も私の部屋もひっくり返すみたいに捜索して、...あれ、騰毗の遺書探してたんだと思う。
愚僧「ただの思い込みでしょ？
佐伯「あいつら、わたしが殺めたか騰毗が自分で死んだか、どっちかだと思ってるのよ。
愚僧「僻んだ見方だよ。
佐伯「もう、安藝の宮島天下の大鳥居も傾こうというもの...いま改修工事してるけどね。

ともかく、住職、本当のところはどう思われて？
愚僧「生きてるよ。
佐伯「なんで？
愚僧「死ぬわけない。
佐伯「僻んだ見方よ...もう歸ったら？...もうおそいんじゃない？
愚僧「あなたは大丈夫？
佐伯「まさか死ぬと？...まさか。わたしが死んだら、例えば、騰毗の骸でも上がった時に、誰が始末つけて遣れるの？ 神社の子たち？ 所詮他人よ。わたししかない。だから、死ねない。待ってる。...だいじょうぶよ。
かくに謂うので、愚僧返す返す気をしっかり持つよう言い、且つ、そのしつこさを佐伯の母上に笑われながら寺に返ったのである。
夜、祇樹古藤記念園の笠原氏から連絡あり、その後話し合って、またいろいろ思案の上深雪さんを何日か古藤園で預かることにしたと。本人は最初すこしだけ嫌がったもののいまや一人になれて始て心落ち着いたように見える、案じなさるな、また連絡する、と。故、夙夜、なにごともなし。

2019.09.13.
早朝に笠原が来た。
時間にして８時すぎ。
愚僧「大丈夫なの？ 古藤園、忙しい時間なんじゃない？
笠原「いや、なんでもありませんよ。ひとりぬければそれなりに、ふたりぬければそれなりに、なんとかなるものですからな。
かくて本堂の縁に笠原一二三氏の報告を聞いた。
曰く「あれから橋本さんと（是が女性職員の姓）手分けして話、それぞれに聞いてあげたんですよ。
奥さんは家に連れて行ってね。和哉さんは店で...
奥さんを外に連れ出して歩かせるのは、ちょっと人目があれかなあと、思ったけれども、そういうのは女性の方が案外つよいからね...どっちかといったら奥さんのほうが連れ出すのはいいじゃろうと。
わたしは奥さんの方、橋本さんは和哉さんのほう...これはなんとなくね、逢って、お見掛けして、なんとなくの相性で行ったら、こうよな？ ということで。橋本と。話してね...
ま、お互いにいろいろ聞いたんです。お二人に。二人して。
で、話すことは先に住職の言われたようなことですよ。お爺さん？ その子供だと謂うてられるのな？ 和哉さんな。
反対に奥さんの方は疑われてます、疑われてます、根も葉もないこと、疑われてます、の一辺倒でね。
あれ、どっちが本当なんだろうね？...住職には、先代の、
「...と、謂うてられましたね。
「でしょう？...なもので、ちょっと、心のストレスでね...それが心配で、一回家族から

引き離した方がいいぞと。
本当は眞夜羽ちゃんだっけね？ あのこのこと考えたら、母親の方連れて來たくなかったんだけれども、深雪さんと一重さんと眞夜羽くんだけ、というのはね...
本当は、おばあちゃんと眞夜羽くんふたりだけに一回させたほうがいいかもしれん...けれども。
「和哉くんは？
「橋本曰くに心赦して...年下の女の方だからね。ちょっとまあ、ふっくらした、ね。...だから安心されたんじゃない？ なんでもかんでも話してられたそうでね。橋本は聞き役。やっぱり、ぎすぎすしてるときに、ぎすぎすしてるもの同士が離れるとね...やっぱり、心は落ち着くね...
だから奥さんに一回、独りなって考えてみられ、と。...別に、入園とか、そんなことはないんですよ。それ、島の人らにもね、よくよく住職の方からも、...ちょっとな、ほとぼり覚ます間のな...
云々。
よろしく頼むと笠原に言った。笠原曰唯唯。
笠原氏帰られたあと、昨夜のかたちが気になって佐伯宅を詣でんと山を下るに路に岡崎保くんとすれ違う。青年団の今の団長、齢三十の二つ三つか。
岡崎くんかわしあう何気ない挨拶のあと急に我に返り曰く「住職知っておられる？
「何を？
「神社の佐伯さん所、いったい、なにかあったの？
「何って？
「いや、今朝がたに、...これはわたしも又聞きなんですけれどもね。朝の早くに、...
６時過ぎくらいなんじゃない？ 下の落合の叔父貴が云うられたことだけれども。
なんか、下の清盛像ありましょう？
「ありますな。海辺ね。
「神社の前な、あそこに朝、清盛公の横っちょの方に、海に背、むけてな...それであそこのお婆さんのほうが...名前なんて言われるん？...あの方、...
「笹予のお婆バ様が？
「なんとももう世の末地の果てにおりますみたような、そんな、正気のない眼して、顔して。
こう、ぼうっと地べたに正座されて背中まるめて...どうしたん？ なに？...と。
落合さんもなにも話しかけても返事も無くてね、それで人だかりも出来ようもの、そうしたら、誰か連絡されたんじゃない？
あそこの...
「奥さんのほう？
「そう、お若い方の方いらっしゃられてね、それでなされるのことが...
なに？
まわりにおられたかたにも挨拶もなかったというてね。
なんでも寝起きみたいな顔して...ちょっとなに？ 朝から色っぽい匂いむらむらさせてな。

それでふらふら來られて。
お婆さんの前に立たれて。...な？
何て謂われたと思う？
「なんて？
「歸るよ、はやく、死にぞこない。...とな。
「あの方が。
「それだけならいいけれども...よくないけれども。そうしたらこう、いきなり横っ面、ぱしーん謂うて、引っぱたかれて。
あれ、いつもあんな感じなん？
それでお婆さんようやく奥さんの方見てね。あら、なに？ みたいな。そういう眼でようやくみられたというてね。
それから奥さん、首根っこつかんで引きずるみたいにして家のほう歸えられたというてね。...それはもう。
ともかく、みんな謂うてるのは、老人が呆けるのはいい。それは仕様もないと。
そうでしょうよ。だれでもみんなそうなるよ。寄る年の呆けも年の功のうちで、と...あの佐伯さんまだそんな耄碌なさる年でもないのにな...
ま、呆けは当たり前、問題ない。わたしらもいつか呆けますからね...ところがそこで問題はあの奥さんよ、と。
それがみんなの謂うてまわることで。
朝からあんなお色気立てて、挙句おばあさん、...義理でもなんでも、亡き夫にたくされたお母さんなんじゃないの？ それを呆けて判らない事をいいことに折檻する、しかも公然と、是は神罰でも下りよるよと。嚴島に浅間山でも噴火するか瀬戸内に四国跨いで大津波でも來るんじゃないか謂うくらいで。ま、そうなんですわ。
...知ってられた？
ここまで聞けば愚僧なんとも口の中の味おかしくなり、ただ惑う心は正体も知らず、適当に岡崎には云って山を寺に上ったのである。

○
（香香美から圓位へ、cc. 久村）
2019.09.13. メール
住職。
ご心労お察しいたします。
混迷深める一方のようですが、なにごともなく綺麗に解決されるようお祈りするだけ。
ところで私は此の 20 日に日本に一時歸國する予定。
私如きに何ができるということでも御座いませんが、帰国しましたら一度宮島に詣でようと思っている次第で御座います。
日本に着きましたら又ご連絡申し上げます。
それまで、くれぐれもお大事に。
　香香美清雅

○
（圓位から香香美へ、cc. 久村）
2019.09.13. メール
香香美様。
ご帰国の件、心づよく思う次第。
心待ち乍らも島の渾沌を憂うどちすこしばかりご報告を、先の長文の追記として。
本日あれから寺にあっても心安らがす、思い餘って昼過ぎに祇樹古藤記念園に詣でた次第。
受付に笠原一二三、奥から駆け寄って驚き「どうされました？
愚僧詫びて云「いささか心がおちつかなくて、深雪さんの様子でも伺いに。
一二三笑ってこちらへどうぞと案内す。
中庭に件のインド・サーラの双樹此の日もその白い花を上空に撒き散らし、風のむた地に白の色を轉ゝとさす。
見上げれば頭の上にかさなり合う枝を終に搦め連理の枝をかたちさすそれ、双樹の間を通り抜けながらに花はにおう。
時に聲聞こえ、圓位さん？...と。
耳にさわった瞬間に消え失せるような、やや高い聲。耳馴れたはずのその聲、此の時ばかりは心ここにもなくて誰かと迷う。
省みれば樹の葉と花の翳り下に或る盲目の人あり。
この人、未だ這いもせぬ比から知る人、その名壬生清雪という人。
女性である。
立ち止まり、圓位謂う。
「よくわかりましたね？...わたしだと。
その人謂う。
「匂い。...それから足音。
「足音？
「静かな...
「聞こえた？
「聞かないから聞こえない...どちらへ？
「あの、...
「眉村さん？
「ご存じ？
その人笑んで、そして云う。
「放っておいてあげれば？
「それは、...
「できないと。...でも、それ、あなたの自分勝手でしょう？
謂って、その人は笑った。
聲もなく。
ややあって圓位問う。

「あなたは、最近、どうですか？
「靜か。...それだけ。
謂って、邪気も無くに小さく笑った。
壬生の淸雪の胸元に擡げあって兩の腕の、その片方の指に蝶が一羽止まる。
安らぎ、翅をゆっくり上下さす。
蝶の羽根。色は白。白地に紫と黑の斑点すこし。
樹木の葉と花の繁みのどこかしら、鳥の一度羽搏いた音がした。
「それでは、すこし、急ぎます。
謂ったわたしに応えるともなく、その人はただ笑む。
館のどこか、上の方で誰かが立てた長い叫び聲がした。長い、引き伸ばされた、とくに何を訴えるでもないうつろな大聲。
我々はその人の前を辭した。
東棟の三階、深雪の入室した部屋の中に入ると、深雪さん寝台の上に座って壁の向いの若い女性の話を聞いていた。
この女、年の比四十ばかりにも見えた。やせ細り、そして執拗に深雪さんにその下着の色を聞きだしてゐる。
深雪さん笑いながら答え、答えても納得しない女、さらに聞き返す。
深雪又笑う。
二人部屋。我々に気付けば深雪さんその朗らかなる儘に返り見、あら？ と。
「和尚様。お久しぶり...
謂って、聲に笑った。
「じゃ、ないですよね？...けど、なんか、もうお久しぶりみたい。
「わたしも...いま、貴女に逢って、懐かしい友達を見たような...
「嘘。...いや。忘れてたからでしょう？ 私の事も、和哉さんも、眞夜のことも...眞夜は？
「元気ですよ（と、知らないことを謂うのだった）。
「みんなは？
「ご家族？
「お母さんや...
「どうだろう？...逢いにいったげないといけないんだろうけれども、
「お忙しい？
「毎日、愚僧の顔ばかり見たもんでもないでしょう？...それでも明日あたりには一度。
「そうですか。...そう。...
「心配？
「されるのは私の方。...でしょう？...心が、本当に折れかけたんですね。...折れちゃった？
「煩わしくない？
「なに？
「此処。なにやかやと、...
と、深雪さんが目の前にさわぐ女を暗にほのめかすものの
「逆。

「逆？
「落ち着く。かえって...こっちにきて、まだ、一晩だけだけれど、逆に。...ご存じですか？
「何？
「あの方、...いま、わたしに...
「話しかけてる？
「パンツの色なにいろなん？ 何色なん？（と、口真似て笑む）あちら、まだ二十の半ば。
「そうなの？
「見えないでしょ。
笠原が云う「もともと摂食障害から、...
「いろいろあったみたいで。
「聞き役になってあげてるの？
「和尚様、思うんですけど。
「なに？
「たぶん私、これからずっとここにいるのね。
「まさか。
「ここから出られないわよ。
笠原「それはないから（故意に大げさに笑いながら）
「違う、...夢見たんです。
「夢？
「夢。
「いつ？
「さっき。...ついさっき、...この方の話、聞いてあげながら、見たの、夢、...
「どんな？
「花の上に寝てるの。大っきな花。...すごく柔かい...その花の上に
笠原「少女の夢だね（笑う）
「寝てると、もうこのまま駄目になっちゃうって...
「またそんな
「違う。じゃなくて、あまりに心地いいから。だから...もう、このままずっと、動けなくなって
「夢は夢だからね...
「このまま、いけないとは思うけど、負けちゃうんです、心が...これでいいかって。
「そう？
「これはこれでいいかなと。...起きなきゃっておもうけど、...だから、...
「だから？
「ね？
と、深雪は愚僧を省みて云った。
「明日眉村に逢ったら、傳えてくださいませんか？
「何と？
「大丈夫、心配しないで、と。

愚僧笑む。

「夫婦だから？ やっぱり、心配なんですよ...心配。

...ね、と。深雪さん云い、愚僧は病室を辭した。

# 奥書

以上は黎マに依って 2020.12.02-23. に書かれたものの第三部その前半

ホームページ

https://senolema.amebaownd.com/

多香鳥ー４

著　　黎マ

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社